



令和2年度

東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室 “S-チル”

震災子ども支援室 10年間の活動報告書

震災子ども支援室は、ある個人の年1200万円10年間の寄附を原資とし、
その他多くの方々の寄附をいただいで活動しました。



東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室 “S-チル”

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1

TEL&FAX : 022-795-3263

E-MAIL : s.children@sed.tohoku.ac.jp



この冊子は環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。





令和2年度 10年間の活動報告書 －2011年～2020年のまとめ－

目次

■ 概 要・スタッフ	01
■ 活動内容	
Ⅰ. 当事者支援	
1. 相談実績	03
2. 親族里親サロン	14
3. 遺児家庭サロン	16
4. 遺児・孤児対象学習支援	16
Ⅱ. 支援者支援	
1. 研修	19
2. ストレスマネジメント	22
3. スーパーヴァイズ	23
4. 関係機関との連絡会議	24
5. 心理士・保健師派遣事業	25
6. その他	28
Ⅲ. 普及・啓発	
1. 震災子ども支援室主催のシンポジウム・講演会	29
2. 研修・講話・講演・講義・出前授業・模擬授業	33
Ⅳ. 情報収集とニーズの把握	
1. みちのく生との座談会	37
Ⅴ. 調査・研究	
1. 学会発表	38
2. 論文・著作物	39
3. 震災こころの支援研究会（D研）	39
4. 研究調査協力	40
5. 調査	41
Ⅵ. 広報	
1. 出版物・報告書	44
2. その他の活動	46
3. 報道関係	49
■ コラム	52
■ スタッフの記録	53

令和2年度 「震災子ども支援室」活動報告

震災子ども支援室 室長 加藤 道代

● 概 要

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、4月新学期になっても大学構内に学生の姿はありませんでした。そして、人気のない構内に美しく咲いている桜は、2011年東日本大震災後の春を思わせました。桜は、あの時も、誰もいない構内で美しく咲いていたからです。

感染拡大防止に関する大学の行動指針を受けて、支援室は、4月より来室や訪問による対面面接を停止しました。また、里親サロンや学習支援、心理士派遣事業も当面の中止を決めました。これは、相談員の長距離の移動を避けるとともに、遠隔地に感染のリスクを持ち込まないためでした。一方で、対面接触の心配のない電話相談については、従来どおり継続して行いました。

6月以降、大学の行動指針レベルが引き下げとなったことに伴い、一部活動が可能となり、被災自治体に派遣していた心理士・保健師派遣事業、里親サロンを再開することができました。しかし、大変残念なことに、毎年、あしなが育英会とともに行ってきた遺児・孤児への学習支援事業は中止を決めざるをえませんでした。この「しゅくだい塾」は、遺児、孤児の子どもたちが集まって、大学生と1対1で勉強をし、業間には皆でレクリエーションを楽しむという親密な接触の機会です。陸前高田市と石巻市を会場とし、例年参加者から好評でしたので、支援室の最後の夏には是非実施したいと最後まで希望をつないでいましたが、感染状況の経過から実施困難と判断しました。

例年2月に実施してきた震災子ども支援室のシンポジウムも、同様の理由から実施を断念いたしました。シンポジウムと講演会は、2011年度の開室から2019年度にかけて、東日本大震災で親を亡くした子どもたちやその保護者の支援に当たる皆様などを対象に、計11回開催し、支援者やマスコミ関係者の方々のべ616名にご参加をいただきました。今年度のシンポジウムを望む声も頂きましたが、皆様のご健康を第一に考えました。

2011年度に開室した震災子ども支援室は、2021年3月に閉室を迎えます。今年度、行動自粛の影響を受けましたが、最後まで相談支援活動が続けることができましたことは、日頃からの皆様のお力添えの賜物と心より感謝しております。

最後に、震災子ども支援室の活動を支えて下さった多くの皆様方に、この場をお借りして感謝申し上げます。震災後、誰もが深い無力感の底に沈んでいた時に、ある個人の方から10年間という長期を見越した多額の寄附のお声がけをいただきました。これが全ての始まりでした。その後、数多くの方々からも善意を寄せて頂くこととなり、継続的定期的な活動を支えていただくこととなりました。閉室年度の今年にあっても、震災子ども支援室への寄附のお申し出をいただいています。私たちが、被災地に向けた支援の意味に向けて自問自答を続けながらも、支援室活動を継続して行うことができたのは、こうした多くの寄附者の方々から頂いた善意と信頼のおかげでした。

活動の実施にあたりましては、自治体の関係各位、なかでも、宮城県中央児童相談所、東部児童相談所、東部児童相談所気仙沼支所、東部保健福祉事務所、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、岩手県教育委員会、福島県教育委員会、各市町村のご担当の方々にお力添えをいただきました。あしなが育英会、宮城県里親会、みやぎ里親支援センターけやき、みちのく未来基金等の各団体とスタッフの皆様には多大なご助力とご支援をいただきました。学習支援に携わった東北大学の学生たちは、子どもたちのお兄さんお姉さんとなって大いに活躍してくれました。毎年実施したシンポジウムには多くのシンポジストの方々に貴重なご経験と知見をご教示いただきました。シンポジウムに参加して下さる方々や、その場においでになれなくても報告書に感想を下さった方々にもお力をいただきました。この場をお借りして、お世話になった全ての方々に、心より感謝の意を表したいと思います。

未曾有と呼ばれた東日本大震災から10年がたちます。あらためまして、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災なさった皆様のご健康、そして子どもたちや“元子どもたち”の健やかな成長を心よりお祈りし、最後のご挨拶とさせていただきます。

令和3年2月

● スタッフ

室 長：加藤 道代（教育学研究科教育心理学講座 教授 臨床心理士・公認心理師）

研究員：一條 玲香（臨床心理士・公認心理師）

相談員：押野 晶子（保健師・看護師）

相談員：亀倉 大地（臨床心理士・公認心理師）※令和2年8月から

相談員：平井 美弥（臨床心理士・公認心理師・臨床発達心理士）※令和2年8月まで

事務員：嶺岸 真琴



平成23年3月20日 石巻市中瀬公園



令和2年12月20日 石巻市中瀬公園

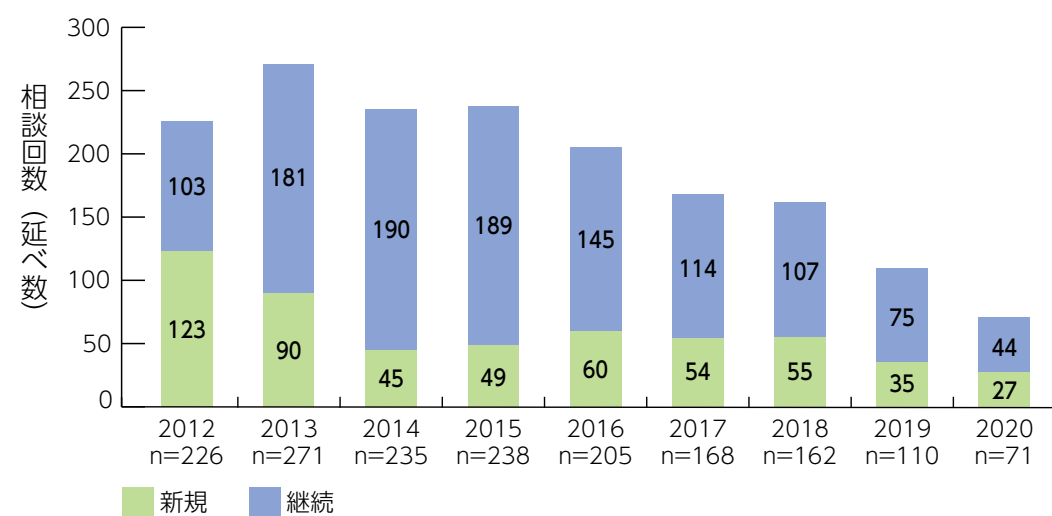
当事者支援は、相談支援、親族里親サロン、遺児家庭サロン、遺児・孤児学習支援など、被災者を対象とした活動である。相談支援は、開室3年目をピークに減少した。親族里親サロンは、2012年度の開始以降7年間、年8回以上のペースで恒常的に行われてきた。しかしながら2019年度以降は里子の措置解除¹に伴い、参加する里親が減少したため活動も縮小した。東部保健福祉事務所とともに実施した遺児家庭サロンは、2013年度に活動を開始し4年間継続したが、生活実態および支援ニーズ調査を行ったところ、年月の経過とともに再婚等で家族形態が変化するなど支援ニーズにも変化があることがうかがえた。このため、東部保健福祉事務所と相談の上、遺児家庭に向けた直接的な支援が求められる時期は超えたと判断し、その後は通常の行政支援でカバーしていくことを決定した。一方、遺児・孤児学習支援は、2015年度から毎年継続して実施した（2020年度は新型コロナウイルスにより中止）。

1 相談実績

2012年4月から2020年12月までの8年9か月間にわたる相談活動を集計した（2020年度は9か月間での集計である）。相談活動（電話・来所・訪問）には、本人・関係者相談をはじめ、相談者支援、情報交換やケース会議といった他機関との連携が含まれる。主な相談活動である電話相談では、フリーダイヤルを2回線設置し、土曜、日曜、祝日を除く平日の9時から17時までを受付時間とした。

● 総相談回数の年次推移

相談回数は、2013年度にピークを迎え、その後減少した。総相談回数は1686回であった。

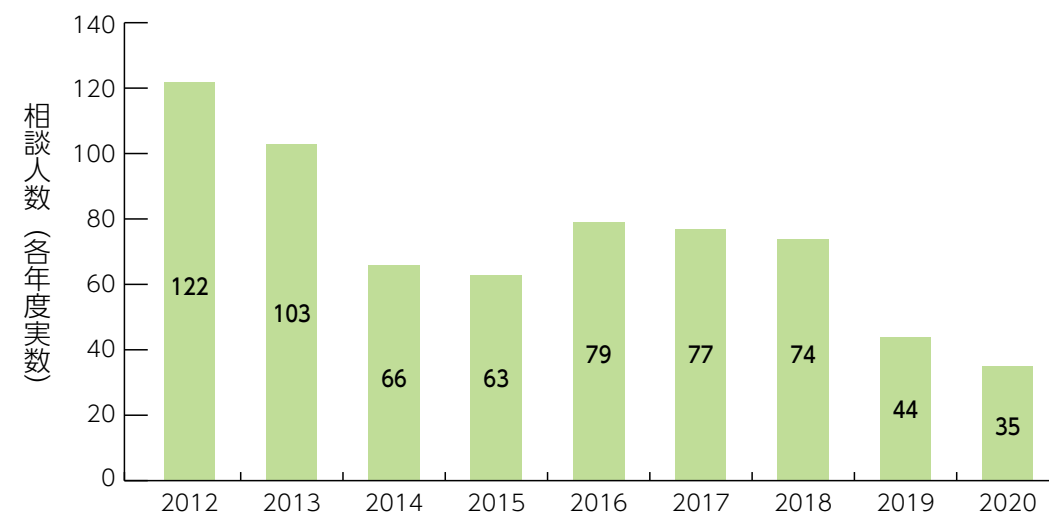


図I-1 総相談回数の年次推移

¹里親委託措置を解除すること。原則、18歳に達すると児童福祉法の適用範囲外になるため里親への委託措置が解除される。

● 相談人数の年次推移

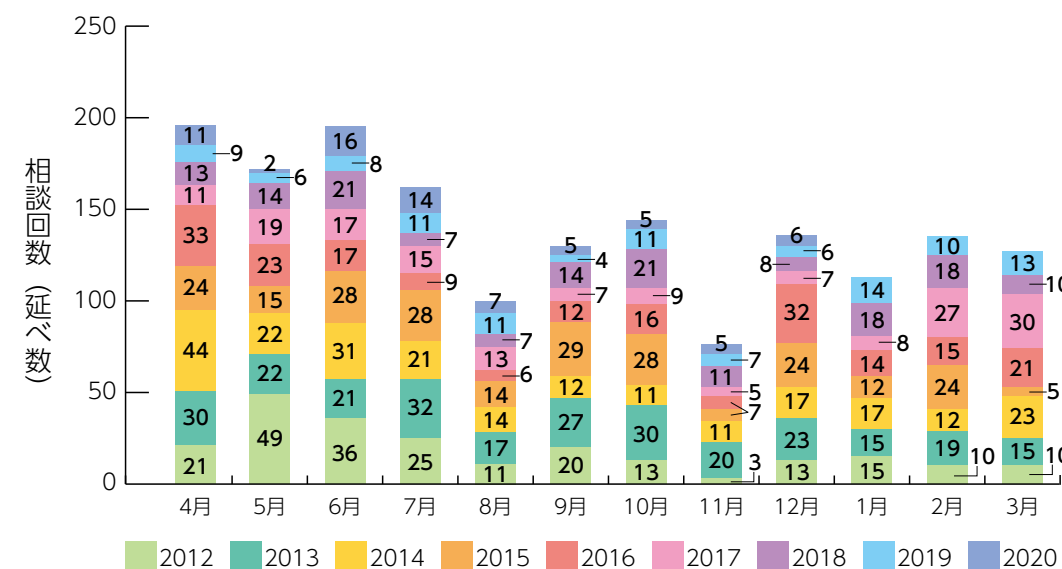
総相談人数（実数）は、540人であった。各年度の人数（実数）と相談回数（延べ数）（図I-1）を比較すると、2014年度～2015年度にかけては、同じ相談者による複数回の相談が多かったことがうかがえる。相談者は匿名で相談することも可能だが、希望すれば、支援室内で共有し継続的に電話相談をすることも可能であった。このような電話相談の仕組みが継続相談につながったと考えられる。



図I-2 相談人数の年次推移

● 月別相談回数

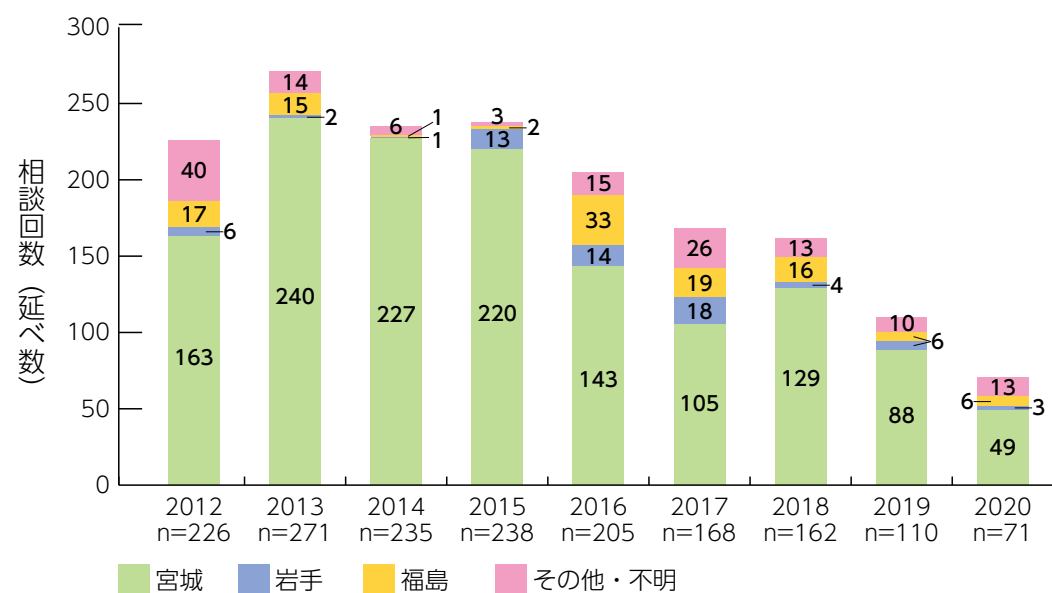
全体では、年度初めの4月から6月にかけて相談が多かった。2017年度以降の1月～3月にかけて相談が増加したのは、被災県内の学校を中心に、電話相談の周知を目的としたチラシを毎年配布するようになった時期と関係していると考えられる。



図I-3 月別相談回数

● 相談者地域推移

相談者を地域別にみると、震災子ども支援室の所在地である宮城県からの相談が圧倒的に多い。2015年度以降は岩手県から、2016年度以降は福島県からの相談が増加した。2015年度から岩手県、2016年度から福島県の国公立小中高・特別支援学校にチラシの配布を行ったことで、同年度の岩手県、福島県からの相談が増加したことが考えられる。また、2018年に発生した大阪府北部地震後の相談など、東日本大震災関連以外の相談も寄せられた。



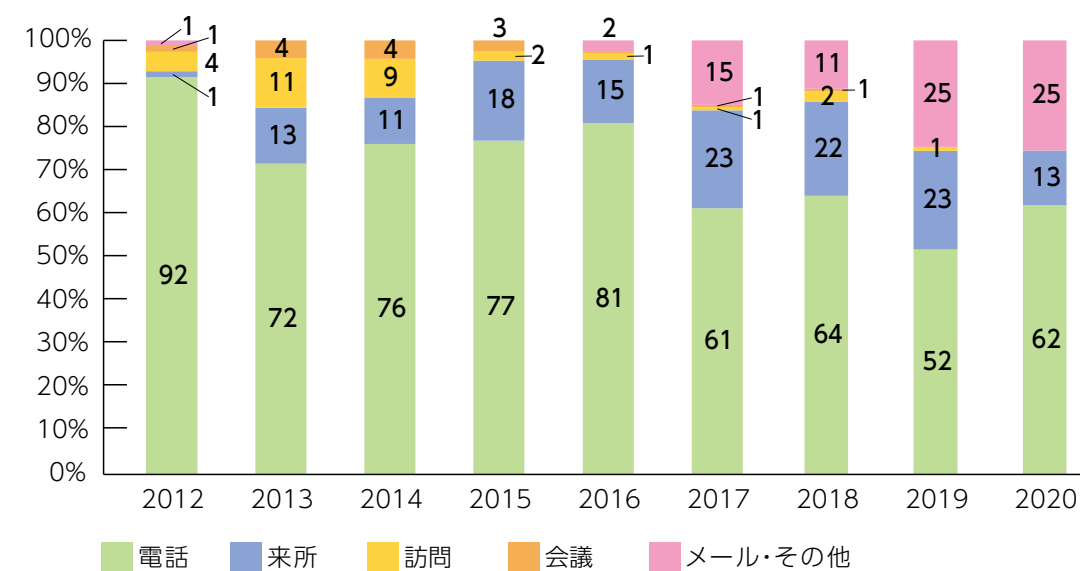
図I-4 相談者地域推移

● 相談形態推移

電話での相談が最も多く、2012年度～2016年度までは約7～9割を占める。2012年度から2015年度に多かった関連機関によるケース会議や訪問などアウトリーチ（外に出る）型の活動は、時間とともに減少した。その背景として考えられるのは、被災自治体や関係機関が開催するケース会議の減少など、時間に伴うニーズの変化とともに、大学側の事情で出張の手段や計画を変更せざるを得なくなったこと、マンパワーの制約、付随して関係機関とのやりとりが電話やメールにシフトしてきたこと、面接室での相談が増えてきたことなど、支援室側の要因も含めて多岐にわたっている。

一方、2017年度からは、メール相談が増加した。メール²での相談は通常行っていないが、チラシにメールアドレスを載せているため、メールで相談が寄せられることもあった。その背景には、子どもたちを含む日本社会へのICT（情報通信技術）の普及が考えられる。また、2020年度には新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、対面相談をメール相談に置き換えた例もあった。

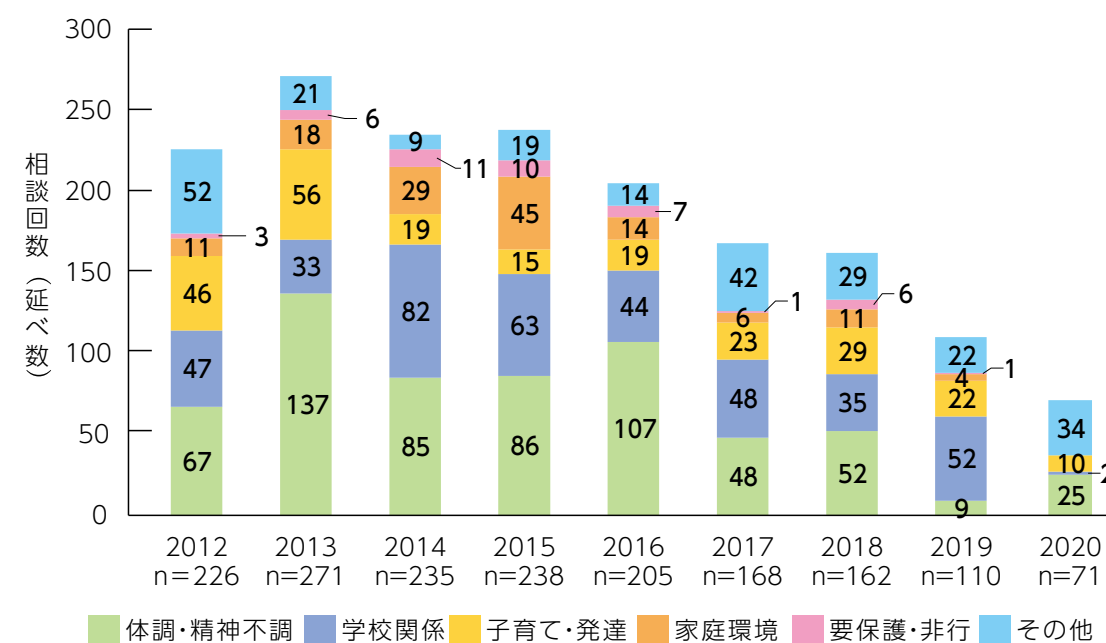
²震災子ども支援室がメール相談を行うかどうかについては、支援室内で議論があった。現在は利便性が注目されているメール相談だが、支援室開室当時はまだ一般的ではなかったことから、対応の見解は十分ではないことを考慮し、メール相談を積極的に標榜はしていない。しかし、実際には子どもからのメールが届くことがある。その場合には拒否はせず、「できれば電話でお話しませんか」という声かけを行いつつ、慎重に対応した。



図I-5 相談形態推移

● 相談内容推移（相談回数（延べ数））

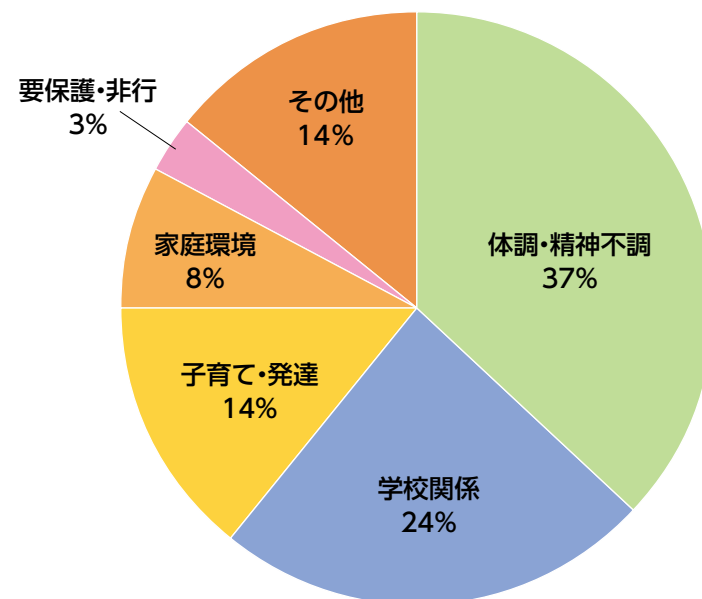
2018年度までは、「体調・精神不調」に関する相談が最も多かった。「子育て・発達」に関する相談は2012年度、2013年度と初期に多く、2014年度には「学校関係」の相談が急増し、2019年度まで一定の相談があった。2014年度以降は、本人相談なかでも「児童・生徒」からの相談が増加したため、「学校関係」に関する相談が増加したと考えられる。



図I-6 相談内容推移（相談回数）

● 相談内容の割合

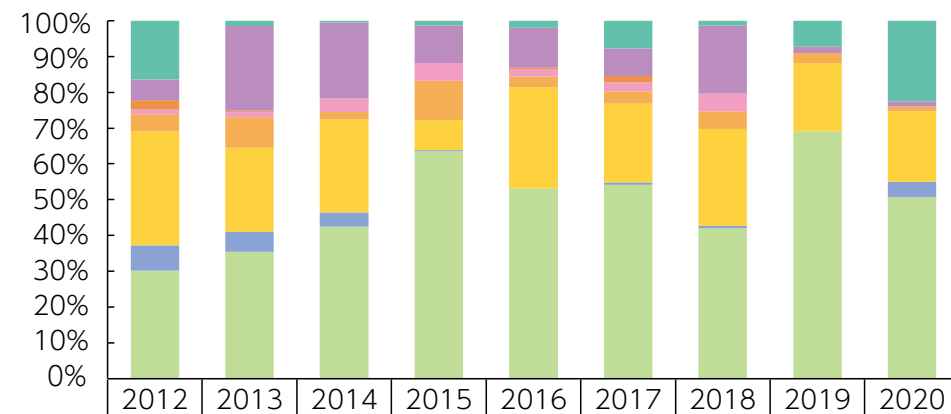
全体では、「体調・精神不調」に関する相談が最も多く、次いで「学校関係」、「子育て・発達」に関する相談が多かった。



図I-7 相談内容の割合 (n=1686)

● 相談者推移

各年を通じて本人からの相談が最も多かった。次いで母親からの相談が多かった。本相談室では、子ども支援を掲げているため母親の割合が高くなったと考えられる。



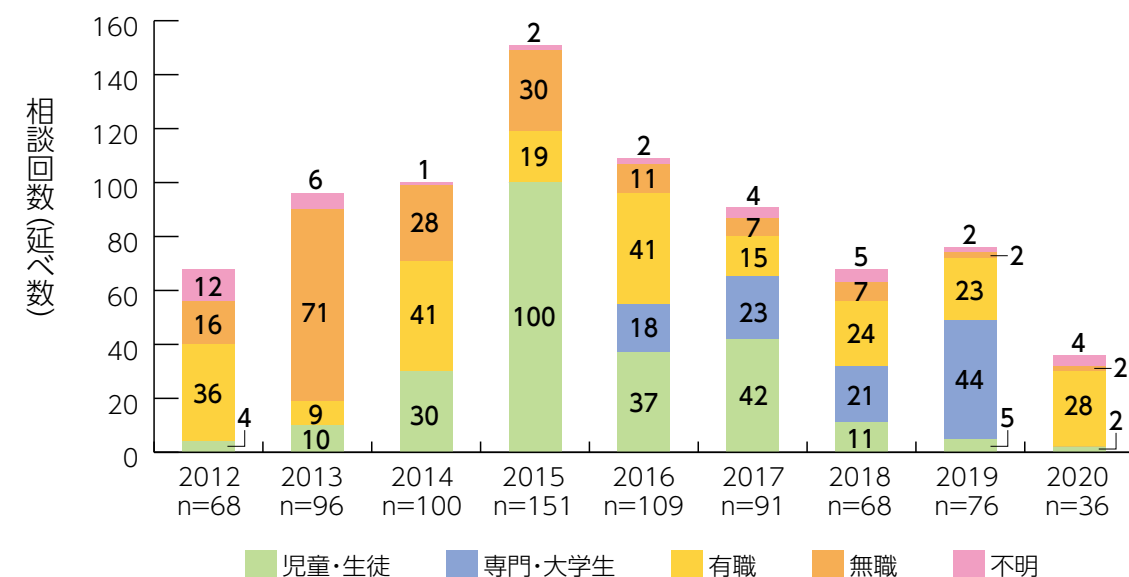
	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
その他・不明	37	4	1	3	4	13	2	8	16
行政・学校・関係機関	13	64	50	25	23	13	31	2	1
親族その他	6	1	0	0	1	3	0	0	0
里親	3	4	9	12	4	4	8	0	0
祖父母	11	23	5	26	6	6	8	3	1
母	72	64	61	20	58	37	44	21	14
父	16	15	9	1	0	1	1	0	3
本人	68	96	100	151	109	91	68	76	36

図I-8 相談者推移 (グラフは割合(%)、表は相談回数)

● 本人相談

① 相談者の属性推移

本人相談を相談者の属性でみると、大人と子ども（震災当時子どもだった「専門・大学生」）からの相談回数は、ほぼ同数であった（ただし、時間の経過とともに子どもから大人に属性が変化している）。「児童・生徒」からの相談が相談開始から徐々に増加し、2016年度からは「専門・大学生」からの相談が寄せられるようになった。震災当時は幼児や小中学生だった子どもたちが、時間が経つにつれて、自分で相談し始めたと言える。また2018年度以降は学生が就職して属性が「有職」になってからも相談を受けることがあり、子どもから大人に成長していく過程で、子どもたちには継続的な相談ニーズがあることがうかがえた。

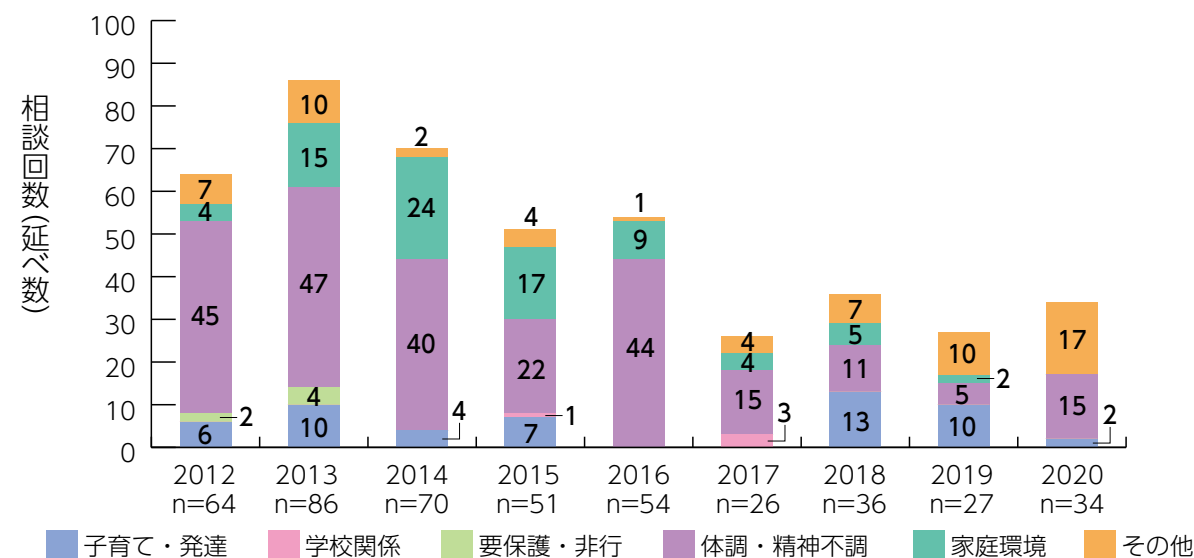


図I-9 本人相談属性推移

（※令和元年度までの年次報告書のグラフでは、初期相談時の属性で計上したケースと相談時の属性で計上したケースが混在していたため、集計に誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。）

②大人(有職／無職／不明)の相談内容

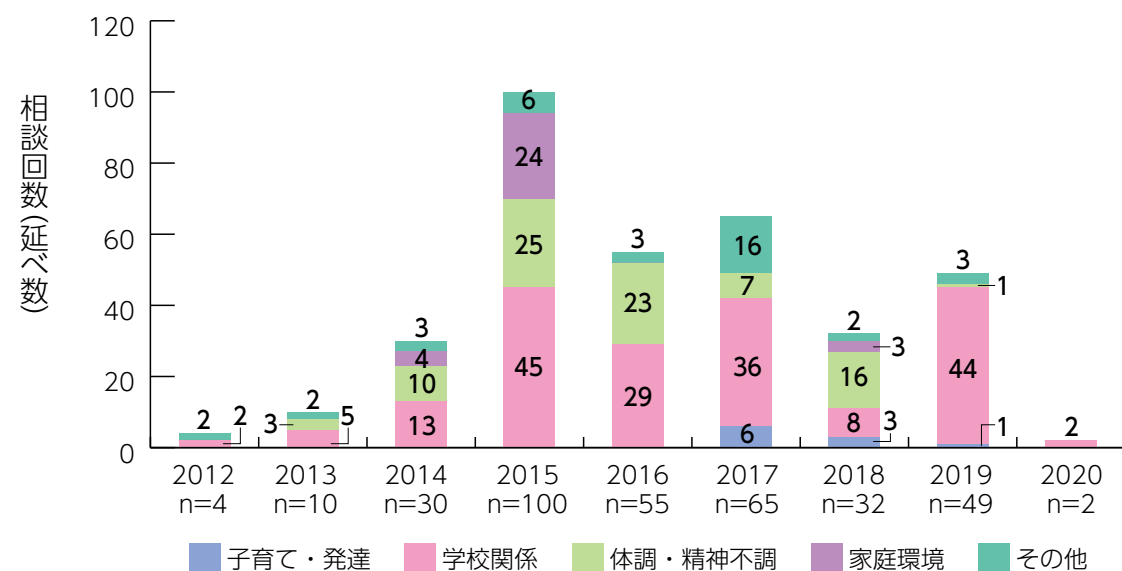
「体調・精神不調」に関する相談割合が最も高く、次いで家族関係・経済的問題などを含む「家庭環境」に関する相談が多かった。「体調・精神不調」では、震災で家族をなくし、精神不調に陥った例、「家庭環境」では震災により職を失い、ひとり親家庭で経済的な不安を抱えている例などがみられた。



図I-10 本人相談における大人の相談内容の推移

③子ども(児童・生徒／専門・大学生)の相談内容

子どもの相談では、「学校関係」の相談が多くを占めた。「学校関係」では、「震災により内陸部に引っ越し、転校したが不登校気味になっている」、「学校内の友人関係がうまくいかない」、「仮設住宅で自分のスペースがない」、「さまざまな事情から学校に行くことができない」といった相談が寄せられた。なお、子どもの相談に「子育て・発達」が含まれるのは、「子育て・発達」に「本人の性格」を分類しているからである。

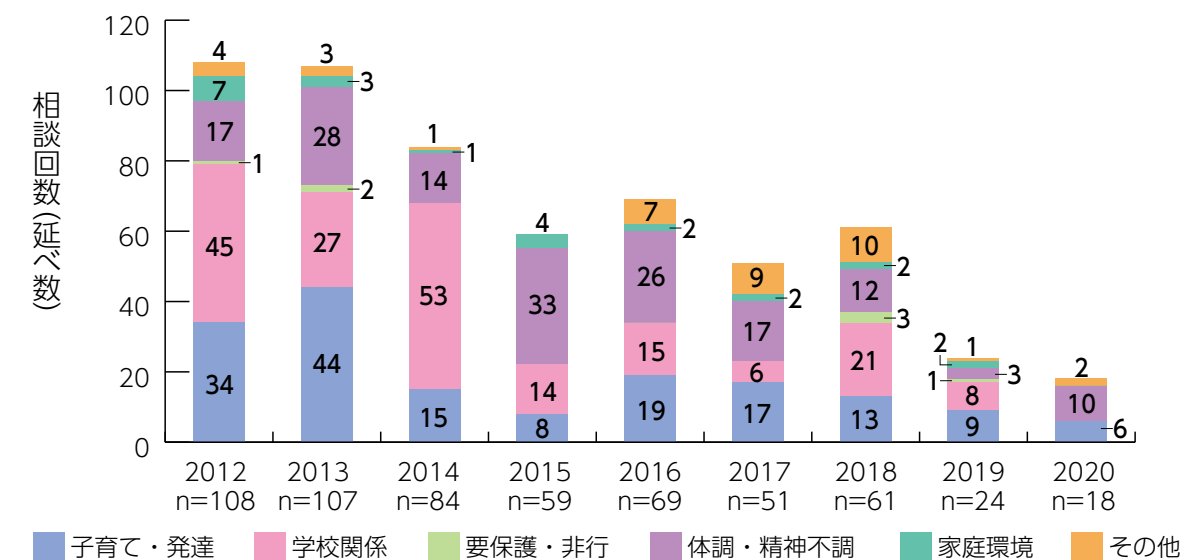


図I-11 本人相談における子どもの相談内容の推移

●関係者(親族)相談

①相談内容推移

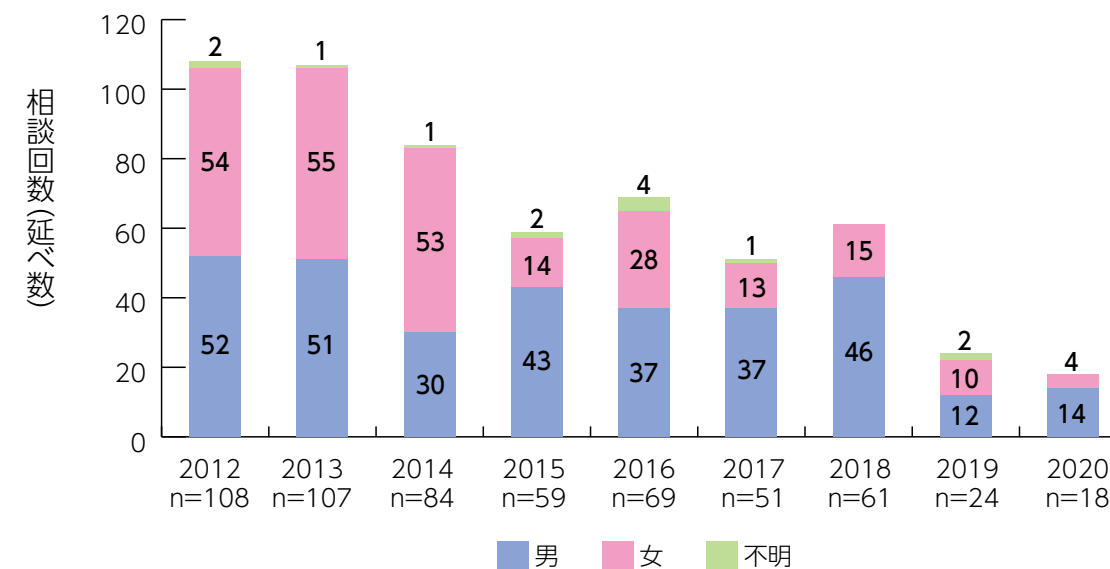
関係者(親族)からの相談は、相談事業開始当初に多く、その後減少した。「子育て・発達」、「学校関係」、「体調・精神不調」が主な相談であった。



図I-12 関係者(親族)からの相談内容推移

②対象者の性別推移

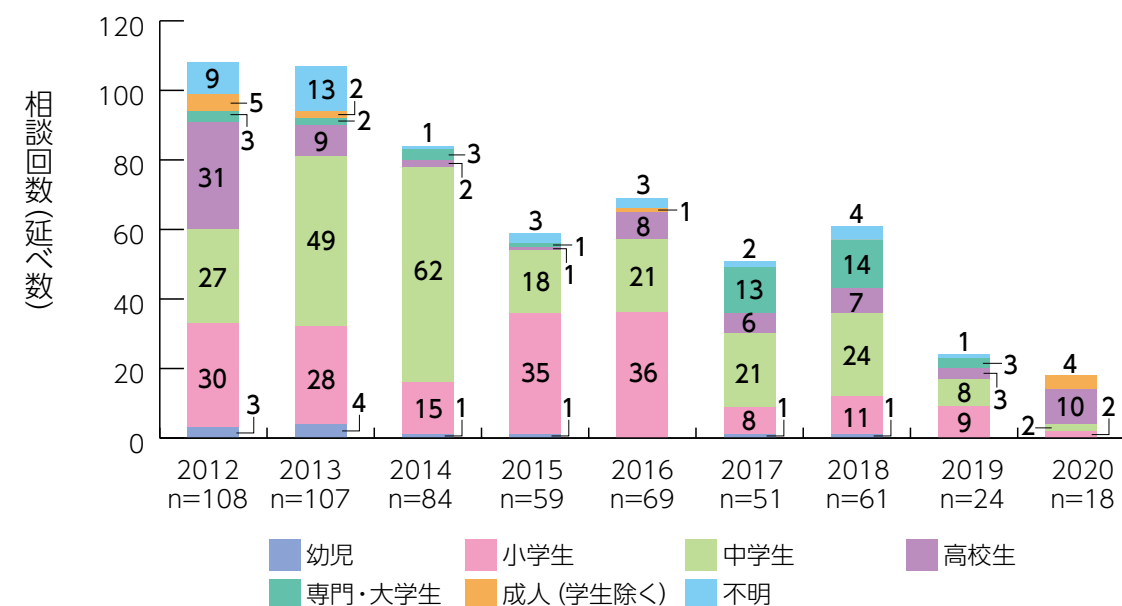
ここでは、関係者(親族)による相談において、その関係者が誰の相談をしているかということ、相談の「対象者」と呼び、以下に、対象者の詳細を記す。2012年度から2020年12月までの合計で、男性対象者に関する相談は322回、女性対象者に関する相談は246回、不明13回であった。



図I-13 対象者の性別推移

③対象者の属性推移

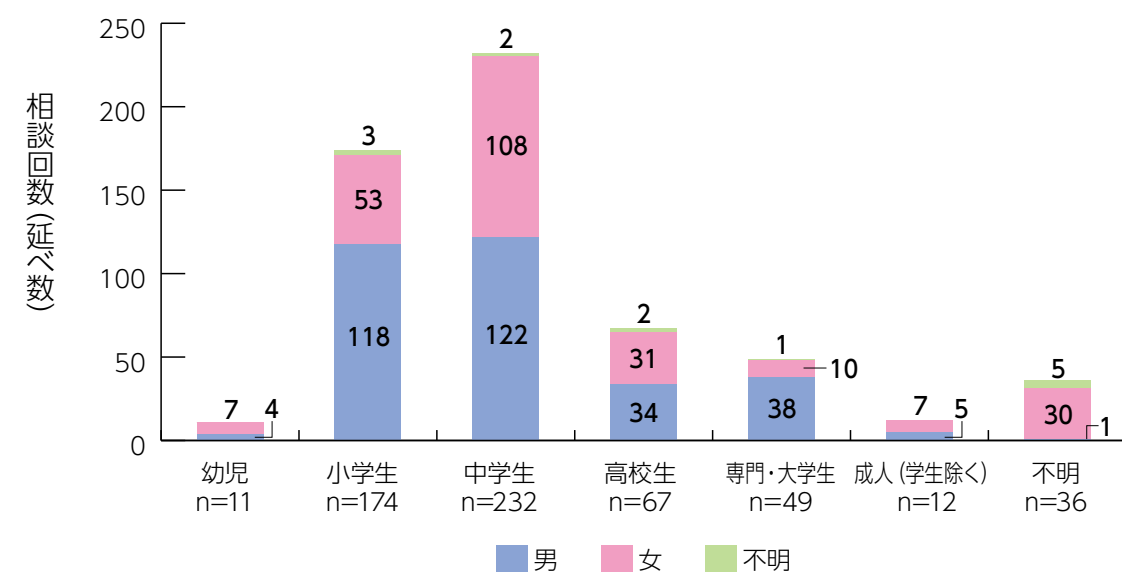
対象者の属性では、「小学生」、「中学生」に関する相談が多かった。2017～2018年度にかけては、「専門・大学生」に関する相談が増加した。数は少ないが、成人した子どもに関する相談も寄せられた。



図I-14 対象者の属性推移

④対象者の属性×性別

「小学生」、「専門・大学生」に関する相談では男性が多いが、「中学生」、「高校生」では、ほぼ同数、「幼児」、「成人(学生除く)」、「不明」では女性が多かった。

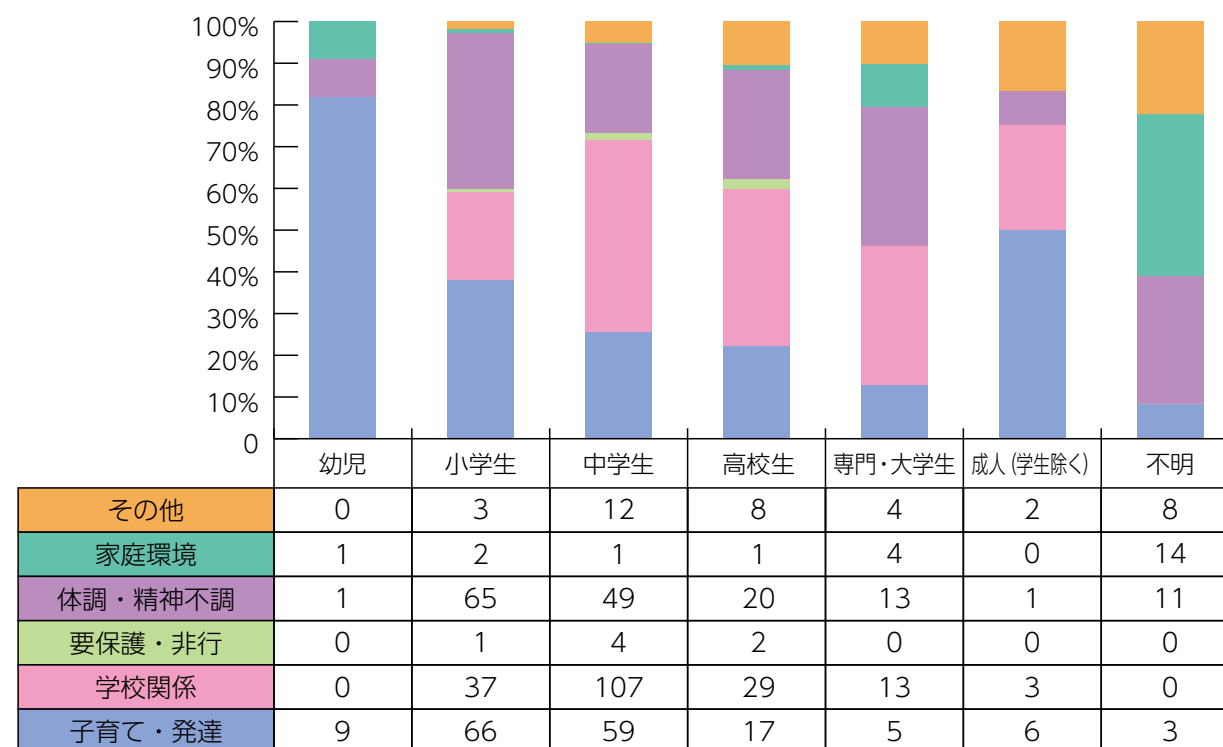


図I-15 対象者の属性×性別

⑤対象者の属性×相談内容

「幼児」では、「子育て・発達」に関する割合が高く、「小学生」では、「子育て・発達」、「体調・精神不調」に関する相談の割合が高い。「中学生」、「高校生」では「学校関係」に関する相談の割合が高く、「専門・大学生」では「体調・精神不調」、「学校関係」の割合が高かった。

具体的には、「親族の死をどのように子どもに伝えたらよいか」、「震災後、甘えることが多くなり、非常に恐怖心が強い」、「こどもの成長(身体的・精神的)にどう対応したらよいか戸惑っている」、「学校との関係がうまくいかない」、「体調・精神不調を訴え不登校気味になっている」といった相談が寄せられた。

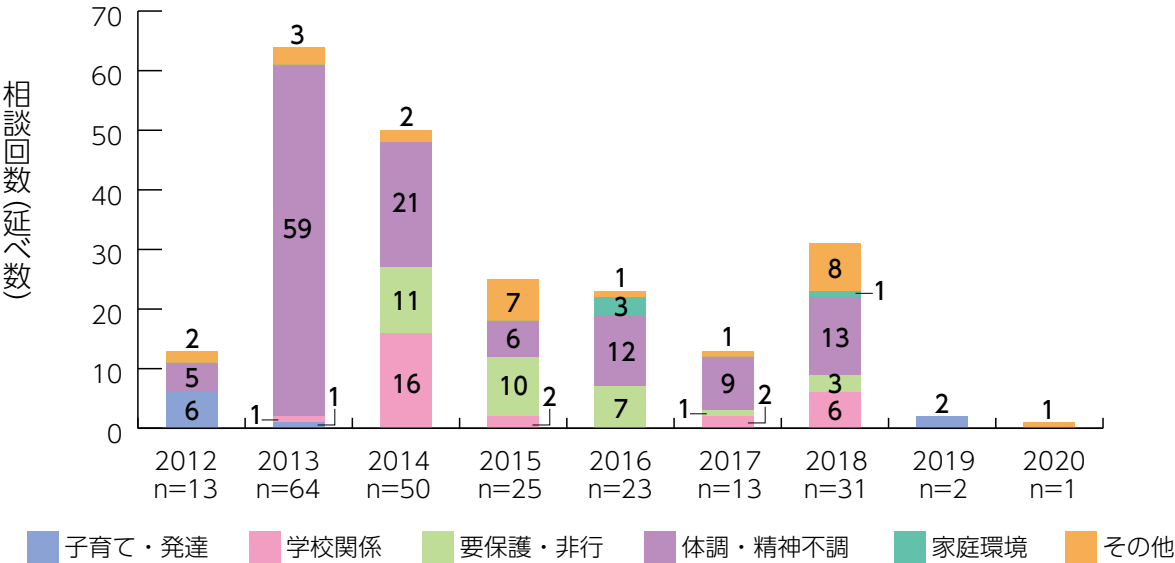


図I-16 対象者の属性×相談内容(グラフは割合(%), 表は相談回数)

● 行政・学校・関係機関による相談の相談内容推移

①相談者の属性推移

行政・学校・関係機関の相談は、コンサルテーションや情報交換、ケース会議などが含まれる。相談件数は、2013年度にピークを迎え、その後減少した。相談初期には、支援者に対するコンサルテーションが多かった。災害後の支援では、支援者自身も多くのストレスを感じるため、支援方法の検討やセルフケアが必要とされる。そうしたニーズが次第に減少していることから、支援者の支援スキルの向上、社会資源の復旧、支援者相互のネットワーク構築などが考えられる。また、精神疾患を抱える「体調・精神不調」や虐待・DVが疑われる「要保護・非行」においては他機関との連携が多く行われたことも、相談件数の多さにつながったと考えられる。特に、震災から時間が経ってから受けつける事例では、既に他機関が何らかのかたちで関わってきていることが少なくなかった。



図I-17 行政・学校・関係機関の相談内容推移

2 親族里親サロン

2012年度から、宮城県東部児童相談所、宮城県東部児童相談所気仙沼支所、宮城県里親連合会（現・みやぎ里親支援センター けやき）との共催で、震災孤児を預かる親族里親に向けた、親族里親サロンを行った。里親サロンは同じ立場だからこそ分かち合える場所として“安心してゆっくりとくつろいでお話できる場所”を目指したものであり、開始当初は、親族との突然の別れによる悲しみや不安を抱えながらも必死に残された子どもを育てなければならぬという思いが語られた。時間の経過とともに子どもの成長に伴った学習面や進学のこと、里親自身の体調の変化などが語られた。当初幼かった里子たちが成長し措置解除になるケースもあり、養育した当時からこれまでの思いを語り合い、参加者で共有することができた。措置解除後も親族里親サロンへの案内を継続することにより、これまでとは異なった立場で参加してくださる里親もあった。

2013年度から3年間は、石巻・気仙沼地域の里親合同親睦会、2016年度は石巻地域での親睦会を行った。子育てに忙しい合間をぬって、ひと時リラックスした、楽しい時間を過ごせるよう心がけた。

9年間の親族里親サロン開催状況を表I-1に示した。合計で71回開催し、延べ226名が参加した。

表I-1:親族里親サロン開催状況(2012年度～2020年度)

年 度	地 区	地域別 実施回数	日 付	参加者数	スタッフ	場 所
2012 (8回)	気仙沼	1	2012年5月16日	7名	11名	本吉公民館
		2	2012年9月6日	6名	10名	本吉公民館
		3	2013年2月1日	6名	6名	本吉公民館
	石巻	1	2012年7月3日	7名	8名	宮城県東部児童相談所
		2	2012年10月31日	4名	7名	宮城県東部児童相談所
		3	2013年2月20日	4名	4名	石巻中央公民館
	東松島	1	2012年8月28日	2名	7名	東松島市コミュニティセンター
		2	2012年11月27日	3名	6名	東松島市コミュニティセンター
2013 (10回)	気仙沼	4	2013年6月5日	3名	11名	本吉公民館
		5	2013年10月2日	4名	7名	本吉公民館
		6	2014年3月6日	5名	6名	本吉公民館
	石巻	4	2013年7月3日	4名	5名	宮城県東部児童相談所
		5	2013年11月6日	2名	5名	宮城県東部児童相談所
		6	2014年2月6日	2名	6名	宮城県東部児童相談所
	東松島	3	2013年6月19日	2名	5名	東松島市コミュニティセンター
		4	2013年9月25日	1名	5名	東松島市コミュニティセンター
	名取	1	2013年8月1日	0名	3名	宮城県中央児童相談所
	親睦会	1	2013年12月4日	21名	5名	南三陸ホテル観洋
2014 (11回)	気仙沼	7	2014年6月18日	2名	6名	本吉公民館
		8	2014年9月17日	2名	6名	本吉公民館
		9	2015年1月30日	1名	4名	本吉公民館
		10	2015年3月4日	2名	4名	本吉公民館

年 度	地 区	地域別 実施回数	日 付	参加者数	スタッフ	場 所
2014 (11回)	石巻	7	2014年5月27日	3名	4名	宮城県東部児童相談所
		8	2014年8月26日	3名	4名	宮城県東部児童相談所
		9	2015年2月17日	3名	4名	宮城県東部児童相談所
	東松島	5	2014年7月15日	3名	4名	東松島市コミュニティセンター
		6	2014年10月28日	4名	4名	東松島市コミュニティセンター
	名取	2	2014年9月10日	0名	1名	宮城県中央児童相談所
	親睦会	2	2014年12月2日	13名	5名	南三陸ホテル観洋
2015 (9回)	気仙沼	11	2015年6月17日	3名	5名	本吉公民館
		12	2015年9月16日	3名	4名	本吉公民館
		13	2016年3月2日	2名	3名	本吉公民館
	石巻	10	2015年5月26日	5名	6名	宮城県東部児童相談所
		11	2015年8月25日	1名	3名	宮城県東部児童相談所
		12	2016年2月16日	6名	4名	宮城県東部児童相談所
	東松島	7	2015年7月14日	1名	4名	東松島市コミュニティセンター
		8	2015年10月27日	2名	4名	東松島市コミュニティセンター
	親睦会	3	2015年12月2日	17名	4名	南三陸ホテル観洋
2016 (9回)	気仙沼	14	2016年6月15日	3名	5名	本吉公民館
		15	2016年9月14日	2名	5名	本吉公民館
		16	2017年3月1日	2名	4名	本吉公民館
	石巻	13	2016年5月24日	6名	5名	宮城県東部児童相談所
		14	2016年8月30日	3名	4名	宮城県東部児童相談所
		15	2017年2月21日	4名	2名	宮城県東部児童相談所
	東松島	9	2016年7月12日	2名	4名	東松島市コミュニティセンター
		10	2016年10月26日	1名	4名	東松島市コミュニティセンター
	親睦会	4	2016年12月9日	3名	5名	ホテル海風土
2017 (8回)	気仙沼	17	2017年6月16日	2名	4名	本吉公民館
		18	2017年9月15日	2名	5名	本吉公民館
		19	2017年11月17日	2名	5名	本吉公民館
	石巻	16	2017年5月23日	3名	6名	宮城県東部児童相談所
		17	2017年8月29日	2名	5名	宮城県東部児童相談所
		18	2018年2月20日	2名	4名	宮城県東部児童相談所
	東松島	11	2017年7月11日	1名	3名	東松島市コミュニティセンター
		12	2017年10月24日	1名	3名	東松島市コミュニティセンター
		20	2018年6月14日	1名	5名	本吉公民館
2018 (8回)	気仙沼	21	2018年9月20日	2名	4名	本吉公民館
		22	2019年3月7日	1名	5名	本吉公民館
	石巻	19	2018年5月25日	2名	5名	石巻中央公民館
		20	2018年9月7日	3名	5名	石巻市体育館
		21	2019年2月20日	3名	4名	石巻中央公民館
	東松島	13	2018年7月5日	3名	5名	東松島市コミュニティセンター
		14	2018年10月25日	1名	4名	東松島市コミュニティセンター
		23	2019年6月20日	1名	4名	本吉公民館
		24	2020年3月12日	1名	4名	本吉公民館
2019 (5回)	気仙沼	22	2019年5月16日	1名	3名	石巻中央公民館
		23	2019年10月24日	3名	4名	石巻市労働会館
	石巻	24	2020年2月13日	2名	4名	石巻市労働会館
		25	2020年10月16日	1名	5名	本吉公民館
2020 (3回)	気仙沼	26	2021年3月19日	(予定)	(予定)	
	石巻	25	2020年9月25日	1名	4名	石巻市労働会館

3 遺児家庭サロン

2013年度から宮城県東部保健福祉事務所主催の「震災遺児ひとり親家庭子育て交流会」へファシリテーターとして協力依頼があり、事業打ち合わせ段階から参加した。2013年度は親子で一緒に参加する場面と、親子に分かれてのプログラムを行った。2014年度はひとり親になられた方を対象としたサロン(交流会)を開催した。2015年度は初めての取り組みとして男性だけのサロン(交流会)も実施した。参加者に実施したアンケート調査に、子どもの思春期に対する不安が述べられていたこともあり、講演会とサロンを合わせて実施した。

表I-2:遺児家庭サロン(ひとり親家庭家族交流会)開催状況(2013年度～2015年度)

年 度	回 数	日 付	参加者	スタッフ	場 所
2013	1	2013年12月8日	3名	2名	石巻中央公民館
	2	2014年1月19日	3名	2名	
2014	3	2014年7月9日	1名	3名	宮城県東部保健福祉事務所 会議室
	4	2014年9月3日	1名	3名	
	5	2014年11月12日	1名	3名	
	6	2014年12月10日	0名	3名	
	7	2015年2月25日	1名	3名	
2015	8	2015年6月3日	2名	4名	
	9	2016年3月6日	0名 ※参加予定者が急遽欠席、0名となる。	4名	
2016	10	2016年9月26日	3名	4名	
	11	2016年11月21日	2名	2名	
	12	2017年1月21日	4名	4名	

4 遺児・孤児対象学習支援

2015年度から震災遺児・孤児への学習の場の提供及び、学習支援、ひとり親や親族里親に対するレスパイトや大学生スタッフとの交流を目的として、“しゅくだい塾”を行った。この事業は震災当初から開催していた親族里親サロンの場で、里親から里子の学習面での悩みが多く語られるようになり、その困り感に震災子ども支援室として何か対応できないかと開始した事業である。あしなが育英会東北事務所・みやぎ里親支援センターけやき・東北大学の大学生・院生の協力のもと開催された。石巻市と陸前高田市ではレインボーハウス、南三陸町では南三陸ホテル観洋を会場とした。通常の開催時期は夏休み・冬休みであったが、定期試験に向けて実施した回もあった。また参加者のアンケート内容から要望のあった、絵画教室や作文教室を取り入れた回もある。2015年度より計15回実施したが、繰り返し参加する子どもたちも見られ、保護者からは毎回参加させたいという声を頂く事業となった。参加した子ども達からは「大学生のお兄さん・お姉さんたちに、とても分かりやすく教えてもらった。楽しかった」との感想も多く聞かれた。

表I-3:しゅくだい塾開催状況(2015年度～2019年度)

年 度	地 区	開催日	開催時間	参加者	学生スタッフ
2015	石巻	2015年 8月3日～5日	13時～20時 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生7名	6名
				中学生12名	
				高校生4名	
		2015年 12月5日～6日	10時～18時30分 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生6名 中学生3名 高校生3名	5名
2016	石巻	2016年 8月4日～6日	13時～20時 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生9名	6名
				中学生7名	
				高校生5名	
		2016年 11月26～27日	11時～20時 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生14名	6名
				中学生6名	
				高校生1名	
	陸前高田	2016年 8月9日～10日	10時～18時30分 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生8名	5名
				中学生7名	
				高校生2名	
2017	石巻	2017年 8月4日～5日	8/4 11時～16時20分 (50分1コマ×4、お楽しみ会、休憩時間を含む) 8/5 10時～16時 (50分1コマ×2、絵画教室120分、お楽しみ会、休憩時間を含む)	小学生18名	10名
				中学生2名	
		2018年 2月17日～18日	2/17 11時～15時20分 (50分1コマ×3、お楽しみ会、休憩時間を含む) 2/18 10時～15時 (50分1コマ×3、お楽しみ会、休憩時間を含む)	小学生17名	9名
				高校生2名	
	陸前高田	2017年 8月8日～10日	8/8 13時～17時30分 (50分1コマ×4、お楽しみ会、休憩時間を含む) 8/9 10時～16時20分 (50分1コマ×5、お楽しみ会、休憩時間を含む) 8/10 10時～16時 (50分1コマ×2、絵画教室120分、お楽しみ会、休憩時間を含む)	小学生21名	6名
				中学生2名	
				高校生1名	
	南三陸	2017年6月4日	<子ども> 10時30分～15時30分 (50分1コマ×2、お楽しみ会、休憩時間を含む) <大人> 10時30分～15時30分 (50分筋膜ケア、90分こぎん刺し、ハワイアンリボン作り、休憩時間、お茶会)	小学生9名	8名
				中学生1名	
				保護者6名	
2018	石巻	2018年 8月7日～8日	8/7 11時～16時40分 (50分1コマ×4、お楽しみ会、休憩時間を含む) 8/8 10時～15時40分 (50分1コマ×2、作文教室120分、お楽しみ会、休憩時間を含む)	小学生19名	10名
				中学生1名	
		2018年 11月3日～4日	11/3 11時～17時50分 (50分1コマ×3、お楽しみ会、休憩時間を含む) 11/4 13時～16時30分 (50分1コマ×3、お楽しみ会、休憩時間を含む)	小学生9名	8名
				中学生1名	
	陸前高田	2018年 8月2日～4日	8/2 13時～17時50分 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む) 8/3 10時～16時50分 (50分1コマ×5、レクリエーション、休憩時間を含む) 8/4 10時～12時30分 (50分1コマ×2、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生3名	6名
				高校生6名	

年 度	地 区	開催日	開催時間	参加者	学生スタッフ
2019	石巻	2019年 8月3日～4日	8/3 11時～16時40分 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む) 8/4 10時～15時40分 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生4名	4名
				中学生5名	
		2020年 2月15日～16日	2/15 11時～16時30分 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む) 2/16 10時～15時30分 (50分1コマ×4、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生9名	8名
				中学生5名	
	陸前高田	2019年 8月7日～9日	8/7 16時45分～18時30分 (はじまりのわ、レクリエーション) 8/8 9時20分～17時30分 (50分1コマ×3、作文教室120分、レクリエーション、休憩時間を含む) 8/9 9時20分～13時 (50分1コマ×2、レクリエーション、休憩時間を含む)	小学生12名	9名
				中学生4名 高校生7名	

*しゅくだい塾では、毎朝、始まりの会を行いその中で、アイスブレイク(ちょっとしたゲーム)を行った。帰りには終わりの会を行った。レクリエーションでは、だんだん〇〇になるボールゲームや、ジャンケンゲーム、エナジーチェック、絵スチャージゲーム(背中に手で絵を描き、次の人に伝えるゲーム)、好物を当てようジェスチャーゲーム、呼吸法、筋膜ケア等を行った。



支援者支援には、支援者を対象とした研修、ストレスマネジメントやスーパーヴァイズ、また支援者・組織の活動への援助である事業運営協力や被災自治体への心理士派遣事業があげられる。支援者支援は、2012、13年度の初期と2018年度以降の後期に活動が多く行われた。当初の活動は、研修講師の依頼、支援者に対するストレスマネジメントや里親担当者へのスーパーヴァイズが中心であったが、支援者が自身で対応できるようになるとともに次第に減っていった。一方、後期の支援者支援では、震災子ども支援室閉室後の地域支援を考えた心理士・保健師派遣や新たに発生した災害に関する支援者支援を実施した。

1 研修

● 保育者向けの研修会

2011年度から2020年度にかけて、被災沿岸部の自治体や保健所からの依頼を受け、保育者を対象とした研修会で講師を務め、被災後の子どもや保護者への対応に関する研修を行った。

表Ⅱ-1:保育者向け研修会開催状況(2011年度～2020年度)

回	日 付	依頼元	場所またはイベント名	内 容	講 師 ³
1	2012年 2月24日	東部児童相談所 気仙沼支所	気仙沼市立公立 保育所保育士研修会	親しい人を亡くした子どもたち への関りに就いての研修会	本郷一夫氏
2	2012年 9月11日	東部児童相談所 気仙沼支所	気仙沼市保育関係者 (保育所・幼稚園) 保育士研修	保育士の行う保護者支援	加藤
3	2012年 11月14日	東部児童相談所	石巻市保育関係者 (保育所・幼稚園) 保育士研修	保育士の行う保護者支援	加藤
4	2018年 10月24日	七ヶ浜町	七ヶ浜町震災後の 乳幼児発達支援研修会	問題行動を呈する子どもの支援 ～発達障害を中心に～	水本有紀氏
5	2020年 9月18日	七ヶ浜町	七ヶ浜町震災後の 乳幼児発達支援研修会	発達が気になるお子さんの 支援について	富永恵子氏

● 里親会向けの研修会

2011年度から2013年度にかけて、震災により里親になった方々への支援の委託を受けた里親会が開催する研修会の講師を務めた。親族里親や養育里親への支援に関する研修を行った。

表Ⅱ-2:里親会向けの研修会開催状況(2011年度～2013年度)

回	日 付	依頼元	場所またはイベント名	内 容	講 師
1	2012年 1月29日	宮城県里親会・ ほほえみの会	岩手県里親会、 宮城県里親会交流会	震災孤児やその養育者との 交流事業に関わる事前研修会	加藤
2	2012年 5月17日	宮城県里親会	里親会総会・勉強会	里親チューターに求められる ことの勉強会	平井
3	2013年 5月16日	宮城県里親会	宮城県里親会研修会	2012年度里親サロンの報告	平井

³※講師名は、震災子ども支援室スタッフ以外は氏を付けて記載。

● 行政機関向けの研修会

2011年度から2019年度にかけて、各行政機関から依頼を受け地域の民生委員や児童委員、裁判所等の職員を対象とした研修会の講師を務め、被災地での支援に関する研修を行った。

表Ⅱ-3:行政機関向けの研修会開催状況(2011年度～2019年度)

回	日 付	依頼元	場所またはイベント名	内 容	講 師
1	2012年 2月13日	仙台市泉区子育て 支援関係機関連絡会	泉区保健センター研修会	被災地に暮らしながら支援を 行うために ～大事にしたいこと、気をつけたいこと～	加藤
2	2012年 2月28日	富谷町(現富谷市)	富谷市健康推進員、 民生委員・児童委員	心の研修会 ～震災後1年を振り返って～	加藤
3	2012年 9月4日	仙台市若林区主任 児童委員	主任児童委員研修会	被災地に暮らしながら支援を 行うために ～1年半がたって～	加藤
4	2012年 12月11日	仙台家庭裁判所	自庁研修会	目に見えるものへの手当て、 目に見えないものへの心遣い	加藤
5	2014年 12月1日	宮城県子ども 総合センター	平成26年度震災を経験 した子どもの発達と支援 を学ぶ研修会	地域との連携を生かした子どもの 発達支援について	平井
6	2016年 5月12日	福島家庭裁判所	福島家庭裁判所自庁研修	東日本大震災後の子どものころ、 保護者のころ	加藤
7	2019年 12月13日	七ヶ浜町	七ヶ浜町震災後の 乳幼児発達支援研修会	乳幼児健診場面における観察視点 と保護者への対応について	富永恵子氏

● 教育機関向けの研修会

2013年度から2014年度にかけて、各教育機関からの依頼を受け教員や養護教諭等を対象とした研修会の講師を務め、震災を経験した子ども達への対応に関する研修を行った。

表Ⅱ-4:教育機関向けの研修会開催状況(2013年度～2014年度)

回	日 付	依頼元	場所またはイベント名	内 容	講 師
1	2013年 8月8日	南三陸町保健部会	南三陸町保健部会研修会	セルフケア体験 ～投函しない手紙を書く～	加藤
2	2013年 11月7日	福島県教育庁相双 教育事務所	道徳教育総合支援事業 地区別推進協議会相馬郡 新地町立駒ヶ嶺小学校研修会	学校、家庭、地域の連携が子どもの 道徳性発達に与えるもの ～つながる大人の中で育つということ～	加藤
3	2014年 5月22日	仙台白百合女子大学	仙台白百合女子大学	震災子ども支援室“S-チル”の 取り組みについて	平井
4	2014年 8月19日	大崎市鹿島台小学校	鹿島台小学校	東日本大震災を経験した児童の 理解と対応について	平井

● 公益財団法人 みちのく未来基金スタッフへの研修会

みちのく未来基金は、2011年9月に震災遺児孤児を対象とした、高校卒業後の進学のための学費支援を目的に発足した団体である。毎年多くの子ども達に専門学校や短大、大学へ進学するための学費支援を行っている。基金のスタッフは、学費支援を行う高校生に毎年1回の面接、また日々学生のさまざまな相談を受け支援をしている。そうしたスタッフを対象に「基本的な関わりの姿勢と技法ーみちのく生の面談のためにー」というテーマで研修を行った。

表Ⅱ-5:みちのく未来基金スタッフ向け研修会開催状況(2014年度～2020年度)

回 数	日 付	参加者	場 所
1	2014年10月27日	「基本的な関わりの姿勢と技法 ーみちのく生の面談のためにー」	みちのく未来 基金事務局
2	2015年8月21日		
3	2016年8月31日		
4	2017年9月11日		
5	2018年8月28日		
6	2019年8月27日		
7	2020年8月	ビデオ研修会	

● その他の支援者向けの研修会

2013年度、2015年度、2017年度、2019年度、2020年度に関係各機関で開催する研修会で講師を務め、子どもや保護者支援、震災遺児孤児への対応に関する研修を行った。

表Ⅱ-6:その他の支援者向け研修会開催状況(2013年度～2020年度)

回	日 付	依頼元	場所またはイベント名	内 容	講 師
1	2013年 9月29日	NPO法人チャイルド ラインみやぎ	仙台市泉区 青年文化センター	東日本大震災後の子ども・ 家庭支援の現状と課題	平井
2	2015年 6月13日	宮城県 臨床心理士会	宮城県臨床心理士会 定例研修会	東日本大震災により親をなくした 子どもたちと里親支援について	加藤
3	2015年 9月29日	宮城県司法書士会	宮城県司法書士会館	震災孤児の里親の現状について	平井
4	2018年 3月28日	厚真町 社会福祉協議会	厚真町社会福祉協議会 職員研修	ストレスマネジメント・ 筋膜ケアについて	加藤・押野
5	2019年 9月14日	全国青年 司法書士協議会	全国青年司法書士会 全国研修会	震災孤児の現状とその課題 ～震災孤児の「幸」にむけて～	平井
6	2020年 12月13日	せんだい杜の 子ども劇場	せんだい杜の子ども劇場の 子育て支援事業 「ママパバライン仙台」研修会	東日本大震災で親を亡くした 子どもと家族の支援	加藤

2 ストレスマネジメント

● あしなが育英会東北事務所

あしなが育英会新人スタッフに対して、あしなが育英会東北事務所を会場として、2012年度は毎月1回各90分、2年目は隔月各60分でストレスマネジメントを行った。グループワークによる最近の状況についての話し合いや共同の作業、また呼吸法や筋膜ケア*などの身体的アプローチにより、心身両面からストレスマネジメントを実施した。

表Ⅱ-7:あしなが育英会新人スタッフストレスマネジメント開催状況(2012年度～2013年度)

年 度	回 数	日 付	内 容	参加者数	スタッフ
2012	1	2012年5月23日	グループワーク	8名	2名
	2	2012年6月13日	グループワーク+筋膜ケア	6名	2名
	3	2012年7月4日	グループワーク+筋膜ケア	6名	2名
	4	2012年7月18日	筋膜ケア+自律訓練法	6名	2名
	5	2012年8月22日	グループワーク+筋膜ケア	6名	2名
	6	2012年9月26日	グループワーク+筋膜ケア	6名	2名
	7	2012年10月24日	グループワーク+筋膜ケア	6名	2名
	8	2012年11月21日	コラージュ	6名	2名
	9	2012年12月19日	粘土	6名	2名
	10	2013年2月6日	グループワーク	6名	1名
2013	11	2013年5月8日	グループワーク+筋膜ケア	6名	2名
	12	2013年7月3日	共同絵画	5名	2名
	13	2013年9月4日	コラージュ	4名	2名
	14	2013年11月13日	筋膜ケア	3名	2名
	15	2014年1月22日	筋膜ケア	6名	2名

*筋膜ケアとは、筋肉についている薄い膜である筋膜をほぐすことにより、血管やリンパの流れ、神経系の動きがよくなり、心身の疲労回復に効果が期待できるものである。

3 スーパーヴァイズ

● 宮城県東部児童相談所里親担当職員対象

宮城県東部児童相談所の管轄の一つに石巻地域がある。石巻では、震災によって親を亡くした子ども達が多かった。子ども達のみならず、親族里親となられた方々や養育里親への相談援助も求められていた。里親担当職員は従来の里親支援とは異なった活動が必要となったことに加えて、対応の難しさも抱えていた。そこで、宮城県東部児童相談所の依頼を受け、担当職員への相談援助活動に向けた助言ならびに心理的負担を軽減することを目的としたスーパーヴァイズを行った。

表Ⅱ-8:宮城県東部児童相談所里親担当職員スーパーヴァイズ開催状況(2012年度～2013年度)

年 度	回 数	日 付	参加者数	スタッフ
2012	1	2012年11月14日	2名	2名
	2	2012年12月17日	2名	2名
2013	3	2013年4月26日	2名	2名
	4	2013年5月14日	2名	2名
	5	2013年7月9日	2名	2名
	6	2013年12月11日	2名	2名
	7	2014年3月11日	2名	2名

4 関係機関との連絡会議

● 南三陸町子ども支援連絡調整会議

震災後の子どもたちの心身の健康と健全な発達の支援を目的として、2012年度から、「南三陸町子ども支援連絡調整会議」(南三陸町保健福祉課主催)の運営と実施への協力を行った。調整会議の実施によって、地域の幼児・児童・生徒関連施設や保健福祉課が情報交換し、連携を深めた。初年度の2012年度は2回、2013年度以降は各年度1回の開催となっていたが、参加メンバーから会議の有用性についての意見が出され、2018年度からは再び各年度2回の開催となった。最終年度の2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止を踏まえ、1回のみで開催となった。

構成メンバーは、2015年度までは、町内の保育所・幼稚園・こども園・小中高の養護教諭、南三陸町子育て支援センター・健康増進係の職員であった。2016年度からは先のメンバーに加えて、南三陸町病院関係者も2回参加し、学校・地域・医療の各現場で起きている状況の共有が図られた。

表Ⅱ-9:南三陸町子ども支援連絡調整会議開催状況(2012年度～2020年度)

年 度	回 数	日 付	参加者数	スタッフ	場 所
2012	1	2012年10月17日	18名	3名	志津川保健センター 会議室
	2	2013年1月30日	14名	2名	
2013	3	2013年7月24日	19名	3名	
2014	4	2014年11月5日	16名	2名	総合ケアセンター南三陸 会議室
2015	5	2015年8月18日	15名	2名	
2016	6	2017年1月30日	20名	2名	
2017	7	2018年1月31日	17名	2名	
	8	2018年8月1日	21名	3名	
2018	9	2019年1月30日	19名	3名	
	10	2019年8月1日	19名	3名	
2019	11	2020年1月29日	21名	3名	
	12	2021年1月22日	25名	3名	
2020					

5 心理士・保健師派遣事業

震災後、子どもと保護者の心の健康をサポートするため、市町村の乳幼児健診に心理士が配置されてきた。震災から9年が経過し、一部市町村では予算措置を受けて心理士配置が縮小されてきた。各市町村から乳幼児健診の場面で心理士によるサポートが必要といった声が寄せられ、震災子ども支援室はニーズのある市町村に心理士を派遣する事業を開始した。派遣心理士は、2018年度は南三陸町の乳幼児健診（1歳6か月健診・発達相談）、七ヶ浜町では保育所や幼稚園巡回相談、発達相談の事業に、山元町では育児相談、保育所や幼稚園の巡回相談に従事した。2019年度は、2018年度と同様に南三陸町・七ヶ浜町の事業に従事した。加えて、2019年9月に発生した台風19号の影響で被災した大郷町の乳幼児健診（2歳半健診・3歳児健診）と発達相談（のびのび相談）にも心理士の派遣を開始した。2020年度は南三陸町・七ヶ浜町・大郷町の各事業に心理士を派遣し、大郷町の乳幼児健診（乳児健診・1歳6か月健診・2歳児健診・3歳児健診）には保健師の派遣も実施した。

表Ⅱ-10:心理士・保健師派遣実施状況(2018年度～2020年度)

年 度	地 区	内 容	日 時	対応人数	場 所
2018	南三陸町 (心理士)	1歳6か月健診	2018年6月8日	1名	総合ケアセンター南三陸健診室
			2018年9月19日	3名	
			2018年11月19日	全体観察	
			2019年1月21日	1名	
			2019年3月1日	2名	
		巡回相談	2018年5月24日	全体観察	志津川保育所
			2018年10月23日	3名	入谷ひがし幼稚園
			2018年12月11日	2名	戸倉保育所
			2019年2月12日	4名	
		育児相談	2018年7月25日	2名	総合ケアセンター南三陸健診室
	七ヶ浜町 (心理士)	巡回相談	2018年5月15日	8名	和光幼稚園
			2018年6月8日	8名	遠山幼稚園・保育園
			2018年6月11日	9名	汐見台幼稚園・保育園
			2018年6月20日	4名	遠山保育所
			2018年6月27日	2名	第二柏幼稚園
			2018年9月5日	5名	遠山保育所
			2018年9月21日	12名	汐見台幼稚園・保育園
			2018年9月28日	1名	第二柏幼稚園
			2018年10月9日	8名	遠山幼稚園・保育園
			2018年10月26日	7名	和光幼稚園
		発達相談	2018年6月19日	2名	七ヶ浜町母子健康センター
			2018年7月4日	2名	
			2018年8月3日	2名	
			2018年11月7日	3名	
			2019年2月20日	2名	
	山元町 (心理士)	育児相談	2018年8月2日	1名	山元町母子保健センター
			2018年11月5日	1名	
			2019年2月4日	全体観察	
		巡回相談	2018年10月15日	2名	ふじ幼稚園
			2018年10月30日	1名	やまもと幼稚園
			2018年11月18日	3名	つばめの杜保育所
			2019年3月1日	3名	

年 度	地 区	内 容	日 時	対応人数	場 所
2019	南三陸町 (心理士)	1歳6か月健診	2019年6月10日	2名	総合ケアセンター南三陸健診室
			2019年7月8日	都合により中止	
			2019年9月18日	2名	
			2019年11月11日	全体観察	
			2020年1月24日	2名	
			2020年3月13日	コロナ対応中止	
		巡回相談	2019年5月23日	3名	名足こども園
			2019年8月8日	10名	伊里前保育所
			2019年10月29日	2名	戸倉保育所・総合ケアセンター南三陸健診室
			2019年12月10日	1名	あさひ幼稚園・総合ケアセンター南三陸健診室
			2020年2月20日	4名	入谷ひがし幼稚園
	七ヶ浜町 (心理士)	巡回相談	2019年6月3日	10名	汐見台幼稚園・保育園
			2019年6月5日	5名	和光幼稚園
			2019年6月7日	7名	遠山幼稚園・保育園
			2019年6月10日	4名	第二柏幼稚園
			2019年6月19日	5名	遠山保育所
			2019年10月16日	6名	和光幼稚園
			2019年10月23日	6名	遠山幼稚園・保育園
			2019年10月25日	5名	汐見台幼稚園・保育園
			2019年10月30日	5名	遠山保育所
			2019年12月3日	3名	第二柏幼稚園
		発達相談	2019年6月18日	2名	七ヶ浜町母子健康センター
			2019年7月3日	2名	
			2019年7月19日	2名	
			2019年8月2日	2名	
			2019年8月21日	2名	
			2019年11月6日	2名	
			2019年11月18日	2名	
			2019年12月4日	1名	
			2020年2月19日	1名	
	大郷町 (心理士)	2歳児健診	2020年1月23日	2名	大郷町母子保健センター
		3歳児健診	2019年12月11日	3名	
			2020年3月18日	1名	
		のびのび相談	2019年12月17日	相談者なしのため中止	
			2020年1月28日	2名	
			2020年2月18日	1名	
			2020年3月24日	コロナ対応中止	
2020	南三陸町 (心理士)	1歳6か月健診	2020年6月5日	全体観察	総合ケアセンター南三陸健診室
			2020年8月26日	2名	
			2020年10月7日	全体観察	
			2020年12月11日	2名	
			2021年3月8日	(予定)	
		巡回相談	2020年7月22日	1名	入谷ひがし幼稚園 総合ケアセンター南三陸健診室
		育児相談	2020年6月30日	1名	総合ケアセンター南三陸健診室
			2020年9月23日	1名	
			2020年11月24日	2名	
			2021年1月21日	2名	総合ケアセンター南三陸健診室 伊里前保育所

年 度	地 区	内 容	日 時	対応人数	場 所
2020	南三陸町(心理士)	育児相談	2021年2月9日	1名	総合ケアセンター南三陸健診室
	七ヶ浜町 (心理士)	巡回相談	2020年7月1日	5名	汐見台幼稚園・保育園
			2020年7月13日	4名	遠山幼稚園・保育園
			2020年7月27日	5名	第二柏幼稚園
			2020年8月26日	4名	遠山保育所
			2020年10月19日	6名	遠山幼稚園・保育園
			2020年10月21日	5名	汐見台幼稚園・保育園
			2020年10月28日	5名	遠山保育所
			2020年11月17日	5名	第二柏幼稚園
			2020年12月16日	3名	和光幼稚園
			2021年1月26日	2名	第二柏幼稚園
		発達相談	2020年6月30日	1名	七ヶ浜町母子健康センター
			2020年8月31日	2名	
			2020年9月23日	2名	
			2020年11月25日	2名	
			2020年12月2日	2名	
			2021年1月27日	1名	
			2021年2月3日	1名	
	大郷町 (心理士)	2歳児健診	2020年4月23日	コロナ対応中止	大郷町母子保健センター
			2020年7月30日	9名	
			2020年10月22日	2名	
			2021年1月21日	1名	
		3歳児健診	2020年6月17日	1名	
			2020年9月9日	4名	
			2020年12月16日	1名	
			2021年3月3日	(予定)	
		巡回相談	2020年7月22日	5名	すくすくゆめの郷こども園
			2020年10月13日	5名	
			2021年2月24日	(予定)	
		のびのび相談	2020年4月28日	コロナ対応中止	大郷町母子保健センター
			2020年5月26日	コロナ対応中止	
			2020年6月23日	2名	
			2020年8月25日	2名	
			2020年9月3日	2名	
			2020年9月24日	2名	
			2020年10月20日	2名	
			2020年12月10日	2名	
			2020年12月22日	1名	
			2021年1月14日	2名	
			2021年2月9日	2名	
			2021年2月18日	(予定)	
			2021年3月2日	(予定)	
	大郷町 (保健師)	乳児健診	2020年4月16日	コロナ対応中止	
			2020年7月9日	7名	
			2020年10月15日	10名	
			2021年1月7日	3名	
		1歳6か月児健診	2020年5月21日	コロナ対応中止	
			2020年8月20日	8名	
			2020年11月12日	4名	
			2021年2月4日	9名	

年 度	地 区	内 容	日 時	対応人数	場 所
2020	大郷町 (保健師)	2歳児健診	2020年4月23日	コロナ対応中止	大郷町母子保健センター
			2020年7月30日	2名	
			2020年10月22日	4名	
			2021年1月21日	3名	
		3歳児健診	2020年6月17日	1名	
			2020年9月9日	6名	
			2020年12月16日	3名	
			2021年3月3日	(予定)	

6 その他

● 徳島県森林づくり推進機構と寄贈先との橋渡し

徳島県森林づくり推進機構は2014年度と2015年度に、「とくしま協働の森づくり事業」の一環として、徳島県立徳島科学技術高等学校の生徒が作成した木製遊具を、宮城県内2町の保育所と児童館に寄贈する活動を行った。震災子ども支援室は、徳島県森林づくり推進機構と寄贈先の橋渡し役を担った。

表Ⅱ-11:木製遊具の寄贈先(2014年度～2015年度)

	年 度	寄 贈 先
1	2014	荒浜保育所・吉田保育所・荒浜児童館・吉田西児童館(全て亘理町)
2	2015	伊里前保育所・戸倉保育所(いずれも南三陸町)

震災や震災支援について広く知ってもらうため、シンポジウム、講演会、研修会を主催した他、依頼を受けて研修、講話、講演、講義、出前授業、模擬授業などを実施した。

1 震災子ども支援室主催のシンポジウム・講演会

2011年度から2019年度にかけて、東日本大震災後、子どもたちやその保護者の支援に当たる方々を対象に、シンポジウムと講演会を計11回開催した。(2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催せず)計11回のシンポジウムと講演会には、支援者やマスコミ関係者ら延べ616名が参加し、被災地の子どもたちの現状や支援の在り方について理解を深めた。

表Ⅲ-1:震災子ども支援室主催のシンポジウム・講演会開催状況(2011年度～2019年度)

	日 付	参加者数	内 容
第1回	2011年 11月12日	80名	シンポジウム 「親を亡くした子どもに対する支援の中長期的展望」 ●講演1 「宮城県の現状とこれまでの取り組み」 宮城県保健福祉部子育て支援課課長 小林 一裕氏 ●講演2 「東北事務所の半年報告」 あしなが育英会東北事務所所長 林田 吉司氏 ●講演3 「社会的養護と養育者支援～親族里親を中心に～」 宮城県里親連合会会長 ト蔵 康行氏 ●講演4 「震災子ども支援室の取り組み」 東北大学大学院教育学研究科教授 本郷 一夫氏
第2回	2012年 3月3日	57名	シンポジウム 「東日本大震災後の子ども支援～震災から1年を振り返って～」 ●報告1 「教育の現場からみえる中学生の姿 ～震災直後から現在までの子ども達の様子から～」 石巻市立万石浦中学校教諭 鹿野 宏美氏 ●報告2 「福島で今、何が起きているのか～心のケアの今後を考える～」 福島県 須藤 弘美氏 ●講演 「震災と子どものこころ」 盛岡少年刑務所医務課医師 児童精神科医 八木 淳子氏
第3回	2012年 9月15日	73名	シンポジウム 「第2回東日本大震災後の子ども支援～診察室や保健室から見える子ども達～」 ●報告1 「一歩前進～子どもたちを癒すもの～」 石巻市立門脇中学校養護教諭 伊藤 香織氏 ●報告2 「福島における心理面の課題」 東北福祉大学教授 渡部 純夫氏 ●報告3 「小児科の診療室から～これまでの経過と今後の課題～」 医療法人豊島医院 豊島 喜美子氏

	日 付	参加者数	内 容
第4回	2013年 3月2日	40名	講演会 「第3回東日本大震災後の子ども支援 災害を経験した子どもたち～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～」 ●講演 「災害を経験した子どもたち～北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻島を例に～」 北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター助教 定池 祐季氏
第5回	2014年 2月1日	39名	シンポジウム 「第5回東日本大震災後の支援の多様性～電話相談ができること～」 ●報告1 「仙台いのちの電話は、震災後の状況にどのように対応したか ～被災者の切実な声は何を訴えていたか～」 仙台いのちの電話 田中 玲子氏 ●報告2 「被災地からころステーション 電話相談の現状」 ころステーション 高柳 伸康氏 ●報告3 「電話相談からみえてきたもの～S-チルでのとりくみから」 東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室“S-チル” 平井 美弥
第6回	2015年 2月7日	34名	シンポジウム 「東日本大震災で親を亡くした子どもたちへの支援～震災後4年目の現状と課題～」 ●報告1 「遺児家庭支援の現状と課題～交流会を立ち上げるまでの経過～」 宮城県東部保健福祉事務所 保健師 三澤 美香氏 ●報告2 「震災遺児に進学の夢を～みちのく未来基金の活動から～」 公益財団法人みちのく未来基金 中村 杏菜氏 ●報告3 「親族里親調査からみえてきたもの」 東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室“S-チル” 押野 晶子
第7回	2016年 2月28日	35名	シンポジウム 「東日本大震災で親を亡くした子どもたちへの支援～それぞれの専門性を活かして～」 ●報告1 学習支援の領域から 「創業20年の学習塾の経営資源を活かした震災遺児への無料学習支援事業」 株式会社セレクトィー 代表取締役 畠山 明氏 ●報告2 歯科の領域から 「矯正歯科専門医は震災で親を亡くした子どもたちにどんな支援ができるのか ～日本臨床矯正歯科医会事業と個人プロボノとで支え続ける口腔成育～」 伊藤矯正歯科クリニック 院長 伊藤 智恵氏 ●報告3 法律の領域から 「震災で親権者を失った子どもたちに《未成年後見人》として 関わっている「弁護士」からの報告」 弁護士法人青葉法律事務所 弁護士 花島 伸行氏
第8回	2017年 2月18日	45名	シンポジウム 「東日本大震災後の子どもたちへの支援～岩手・宮城・福島の6年間～」 ●宮城から「被災地の日常と学校教育相談活動～被災地内支援者から見えてくるもの～」 宮城県スクールカウンセラー 星 美保氏 ●福島から「東日本大震災・原発事故と福島子ども～長期避難とその影響について～」 特定非営利活動法人ピーンズふくしま 常務理事 中鉢 博之氏 ●岩手から「5年間の相談支援活動をふりかえる ～大槌町子育て支援センターでの取り組みを中心に～」 臨床心理士 土屋 文彦氏

	日 付	参加者数	内 容
第9回	2017年 12月9日	101名	シンポジウム 「東日本大震災後の子どもたちへの支援 ～高校生・大学生が見つめる被災地の現在～」 ●高校生ポスター発表(6校11グループ) ●宮城県気仙沼高等学校 「市民の防災に対する関心を高める方法」 「気仙沼市の防災の課題『率先避難と徒歩避難の問題!』」 「解決に近づくための防災ビル」 ●仙台白百合学園高等学校 「震災による被災者の支援(精神面・身体面)～私たちにできること～」 ●岩手県立大船渡高等学校 「震災の記憶」 ●岩手県立一関第一高等学校・附属中学校 「震災から学ぶ活動(避難行動調査と中学生への災害へ備える授業の実施)」 「沿岸被災地と内陸をつなぐ活動(沿岸内陸コラボレシピの開発と普及)」 「沿岸被災地における健康支援活動(生活不活発病予防のための農園活動)」 ●宮城県石巻西高等学校 「本校の国際交流について」 「本校の防災交流について」 ●福島県立磐城桜が丘高等学校 「絆と結束の町 城山～ハザードマップ作りをとおして～」 「絆と結束の町 城山～防災カードで変える未来～」 ●大学生プレゼンテーション(6団体) ・地域復興プロジェクト“HARU” 「子ども支援の変遷～震災直後から現在までのHARUの取り組み～」 ・NPO法人キッズドア 「東日本大震災からみる子どもの貧困～学習支援というアプローチ～」 ・陸前高田応援サークルぽかぽか 「子ども×大学生in陸前高田」 ・インクストーンズ 「教育学部生からみた被災地の子どもたち」 ・福興youth 「いわきで出会った子どもたち～学生ボランティアにできることは何か?～」 ・基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた 「私たちが学んだ被災地の子どもを取り囲む環境」
第10回	2019年 2月16日	40名	講演会 「東日本大震災後の子ども達への支援～8年間の診療と研究からみえるもの～」 ●講演 「東日本大震災後の子ども達への支援～8年間の診療と研究からみえるもの～」 岩手医科大学医学部神経精神科学講座講師 いわてこどもケアセンター 副センター長 八木 淳子氏

	日 付	参加者数	内 容
第11回	2020年 2月22日	52名	シンポジウム 「東日本大震災後の子どもたちへの支援～心理士からみた震災～」 ●報告1 「活動を通して子どもの変化から感じること」 社会福祉法人大洋会 児童家庭支援センター大洋 支援相談員兼心理療法士 (臨床発達心理士) 大和田 綾子氏 ●報告2 「震災後の乳幼児健診における心理支援活動」 仙台市児童相談所保護支援課 親子こころの相談室他 (臨床心理士・公認心理師) 二井 奏子氏 ●報告3 「東日本大震災発災後から現在までの、子どもたちへの支援を通して 得られた気づき～現地のスクールカウンセラーの立場から～」 宮城県スクールカウンセラー他 (臨床心理士・公認心理師・家族相談士) 鈴木 正貴氏



第11回シンポジウム「東日本大震災後の子どもたちへの支援～心理士からみた震災～」

2

研修・講話・講演・講義・出前授業・模擬授業

●

遺児孤児家庭向けの研修会

2011年度、2012年度及び2014年度に、東日本大震災により遺児、孤児となった子どもたちを育てているご家庭向けの研修会を宮城県内4市町で計6回、主催した。

表Ⅲ-2:遺児孤児家庭向けの研修会開催状況(2011年度～2014年度)

	日 付	参加者数	場 所	内 容	講 師
1	2011年 11月19日	30名	東北大学文科系総合 研究棟(仙台市)	東日本大震災後のケアのあり方	東北大学大学院教育学研究科 教授 本郷 一夫氏
2	2012年 10月20日	16名	気仙沼中央公民館条南 分館(気仙沼市)	みんなで支える 子育てイン気仙沼 「父子家庭の抱える現状と課題」	NPO法人 全国父子家庭支援連絡会 理事 村上 吉宣氏
3	2012年 11月10日	15名	亘理町中央公民館 (亘理町)	みんなで支える 子育てイン亘理 「父子家庭の抱える現状と課題」	NPO法人 全国父子家庭支援連絡会 理事 村上 吉宣氏
4	2014年 7月7日	17名	宮城県気仙沼保健福祉 事務所(気仙沼市)	未成年後見人制度 ・里親制度についての研修会	弁護士法人青葉法律事務所 弁護士 花島 伸行氏
5	2014年 10月20日	30名	宮城県東部児童相談所 (石巻市)	未成年後見人制度・里親制度 についての研修会	弁護士法人青葉法律事務所 弁護士 花島 伸行氏
6	2014年 11月4日	19名	TKP仙台西口ビジネス センター(仙台市)	未成年後見人制度・里親制度 についての研修会	弁護士法人青葉法律事務所 弁護士 花島 伸行氏

●

徳島県立徳島科学技術高等学校の生徒向けの講話

徳島県森林づくり推進機構は、徳島県立徳島科学技術高等学校の生徒が作成した木製遊具を、宮城県内2町の保育所と児童館に寄贈する活動を行った。震災子ども支援室は、寄贈先との橋渡し役を担った関係で、2013年度から2015年度にかけて各年度1回、東北大学大学院教育学研究科で、同校生徒に講話を行った。

表Ⅲ-3:徳島県立徳島科学技術高等学校の生徒向けの講話実施状況(2013年度～2015年度)

	日 付	場 所	内 容	講 師
1	2013年12月13日	東北大学大学院教育学研究科	災害後の子どものころ	加藤
2	2014年12月12日	東北大学大学院教育学研究科	東北大学震災子ども支援室 “S-チル”の取り組み ～東日本大震災で親をなくした 子どもの養育に関する調査～	平井
3	2015年12月11日	東北大学大学院教育学研究科	災害後の子どものころ	加藤

●

仙台白百合学園高等学校の生徒向けの出前授業

2017年度に2回、仙台白百合学園高等学校で出前授業を実施し、1年生の生徒向けに震災をテーマとするインタビュー調査に関して、スーパーヴァイズを行った。

表Ⅲ-4:仙台白百合学園高等学校の生徒向けの出前授業実施状況(2017年度)

	日 付	参加者 (教員1名を含む)	場 所	内 容	講 師
1	2017年 10月25日	7名	仙台白百合学園高等学校	インタビュー調査の方法	一條
2	2017年 11月8日	7名	仙台白百合学園高等学校	インタビューデータのまとめ方	一條

● 東北大学の学生向けの講義

震災子ども支援室の室長加藤は、2018年度から2020年度にかけて計3回、東北大学全学教育において、東北大学課外・ボランティア活動支援センターが担当する「東日本大震災からみる現代日本社会」の授業のなかで、学部学生を対象として、「震災が子どもに与える影響と親子への支援」に関する講義を行った。

● その他の研修、講話、講演、模擬授業など

2012年度から2019年度までに、中学校や高校の生徒、大学生、一般の方々などを対象とした研修、講話、講演、模擬授業などを計18回、実施した。

表Ⅲ-5:その他の研修・講話・講演・模擬授業などの実施状況(2012年度～2019年度)

	日 付	場所またはイベント名	内 容	講 師
1	2013年 2月27,28日	東北大学復興アクション100+ 教育学研究科主催／ 教育の視点からの震災復興支援 －研修会ワークショップ	(27日)子どもたちの今 (28日)子どもたちのこれから	加藤
2	2013年 2月28日	東北大学復興アクション100+ 教育学研究科主催／ 教育の視点からの震災復興支援 －研修会	震災子ども支援室(S-チル)の取り組み －見えるものへの手当てと 見えないものへの心遣い－	加藤
3	2013年 10月31日	南三陸町立歌津中学校	思春期とストレス	加藤
4	2014年 9月4日	群馬県立高崎高等学校からの 大学訪問	模擬授業 「災害後の子どものこころとケア」 「災害後の長期的支援の方向性」 「震災遺児家庭における子育てと 生活の現状について」	加藤
5	2014年 9月13日	多賀城公園野球場 仮設住宅集会所	宮城県臨床心理士会ミニプログラム (筋膜ケア)	平井 押野
6	2014年 10月30日	気仙沼市立面瀬中学校	思春期とストレス	加藤
7	2015年 3月8日	東北大学復興アクション100+ 講演・シンポジウム 「被災者支援の今後の課題に ついて考える」	震災孤児の親族里親の声から	加藤

	日 付	場所またはイベント名	内 容	講 師
8	2015年 8月9日	日本災害看護学会教育講演	東日本大震災後の子どものこころとケア －これまでとこれから－	加藤
9	2015年 8月11日	平成27年度東日本大震災 心の復興事業 こころの復興フォーラム in みやぎ ～子どもたちの未来のために～	「子どもたちの未来のために」 －こころの復興をめざして 学校の現状から－	加藤
10	2015年 10月29日	気仙沼市立面瀬中学校	思春期とストレス	加藤
11	2016年 3月5日	東北大学復興アクション100+ 講演・シンポジウム 「東日本大震災被災地域への サイコロジカルエイド 東日本大震災後の 長期的支援の方向性」	震災遺児家庭における 子育てと生活の現状について	加藤
12	2018年 8月1日	南三陸町 地域子育て支援センター	子育て講話－乳幼児のこころのそだち－	加藤
13	2018年 10月17日	東北大学災害科学国際研究所 災害と健康プロジェクトユニット	東日本大震災後の子ども支援 －震災子ども支援室の取り組み－	加藤 一條
14	2018年 10月28日	子どもの虐待防止推進 全国フォーラムinみやぎ	第4分科会 「被災地における子どもや家庭への支援」	加藤
15	2018年 10月29日	気仙沼市立鹿折中学校	思春期とストレス	加藤
16	2018年 11月15日	東北大学大学院教育学研究科 国際シンポジウム登壇者への 講話及び被災地紹介	東日本大震災と震災子ども支援室の 取り組みについて	加藤 一條
17	2019年 3月5日	摂南大学からの 訪問グループへの講話	東日本大震災後の子ども支援 －震災子ども支援室の取り組み－	加藤 一條 平井
18	2019年 8月1日	南三陸町 地域子育て支援センター	子育て講話－子どもを理解し、気持ちに添う－	二井奏子氏

初年度以降3年間、情報収集とニーズの把握は特に頻繁に行われた。支援を始めるにあたって、被災地のニーズを探り、何ができるかを模索しながら支援室の活動を組み立てていった時期であった。沿岸被災地の児童相談所、保健、福祉、子ども関連の行政機関、民間の支援団体等を訪問し、情報収集を行った。

関係機関との繋がりができたことで、訪問だけでなく、来室による情報交換も増えていった。また、講演会や研修会に参加しての情報収集も行われた。

活動4年目の2014年度には、開室当初は繋がることの難しかった遺児・孤児たちと出会う機会が得られるようになり、4回の座談会を開催することができた（みちのく生との座談会）。座談会での遺児・孤児たちの言葉の数々から、震災子ども支援室が考えさせられたこと、教えてもらったこと、支援について振り返ったことは非常に多かった。そこでの言葉は、震災子ども室が折に触れて思い起こし、活動を振り返るよりどころとなった。

1 みちのく生との座談会

公益財団法人みちのく未来基金から支援を受けながら大学で学ぶ“みちのく生*”に集まっていたき、座談会を行った。青年期（座談会当時、大学生、専門学校生等）となった震災当時の“子どもたち”は、自分のこと、地元のこと、相談・支援について思うこと、これからのこと、子どもたちへ伝えたいことについて自分の言葉で自分の考えを語ってくれた。

*公益財団法人みちのく未来基金の支援を受け、大学や専門学校等に進学している震災遺児・孤児の方々。

表Ⅳ:みちのく生との座談会実施状況(2014年度～2016年度)

	日 時	参加者	スタッフ	場 所
1	2015年3月26日	4名	2名	東北大学大学院教育学研究科
2	2015年3月31日	1名	2名	
3	2015年9月24日	4名	2名	
4	2016年9月6日	3名	2名	

シンポジウム・学会での発表、調査、論文発表、研究会の主催などの活動を行った。震災子ども支援室の活動前半は、支援実践が活動の中心であったが、2017年度には、閉室を見据え、これまでの知見を後世に遺すことを目的として研究スタッフが加わった。そのため、2017年度と2018年度の調査・研究活動は増加した。2019年度以降はそれまでの知見を報告書にまとめたり、書籍を作成したりすることに力点が置かれた。

1 学会発表

- 加藤道代・平井美弥『東日本大震災で親をなくした子どもの養育に関する調査－親族里親の声から－』東北心理学会第68回大会 2014年11月1-2日 於:秋田大学
- 加藤道代『東日本大震災5年目における震災遺児家庭の現状』日本発達心理学会第27回大会 2016年4月29日-5月1日 於:北海道大学
- 一條玲香・大堀和子・押野晶子・平井美弥・加藤道代『東日本大震災の子ども支援－“S-チル”5年間の相談を概観して－』東北心理学会第71回大会 2017年7月15-16日 於:尚絅学院大学
- Reika ICHIJO・Michiyo KATO "Investigation of the Children's Support Office's Efforts to Support Mental Healing" World Bosai Forum/IDRC 2017 in Sendai Nov.25-28,2017
- 一條玲香・加藤道代『東日本大震災をきっかけに里親となった親族の心境』日本発達心理学会第29回大会 2018年3月23-25日 於:東北大学
- Reika ICHIJO・Michiyo KATO "Support for Children after the Great East Japan Earthquake: Trends and Characteristics in Consultations Conducted by the Support Office for Children Affected by the Disaster" 16th WAIMH world congress in Rome May.26-30,2018
- 一條玲香・加藤道代『震災後の電話相談における相談員の対応①－東北大学大学院教育学研究科“震災子ども支援室”における相談記録の量的分析』日本心理臨床学会第37回大会 2018年8月30日-9月2日 於:神戸国際展示場
- 加藤道代・一條玲香『震災後の電話相談における相談員の対応②－東北大学大学院教育学研究科“震災子ども支援室”における相談記録の内容分析』日本心理臨床学会第37回大会 2018年8月30日-9月2日 於:神戸国際展示場
- 一條玲香・加藤道代『震災遺児・孤児への学習支援を通した学生の学びに関する研究』東北心理学会第72回大会 2018年11月23-24日 於:岩手大学
- 一條玲香・加藤道代『東日本大震災をきっかけに里親となった親族の養育』日本発達心理学会第30回大会 2019年3月17-19日 於:早稲田大学

2 論文・著作物

- 加藤道代(2012). 震災孤児・遺児への支援へ向けて
ー東北大学大学院教育学研究科「震災子ども支援室」の自問ー 社会教育, 675, 62-63
- 加藤道代(2014). 震災子ども支援室「S-チル」の子ども支援、保護者支援 教育と医学, 730, 52-59
- 加藤道代・丸山和昭(2015) 子ども支援と心のケア 青木栄一(編) 大震災に学ぶ社会科学 第6巻
復旧・復興へ向かう地域と学校 東洋経済新聞社 pp.199-228.
- 一條玲香・加藤道代(2017). 震災後のこころの相談支援活動に関する文献を概観して
東北大学大学院教育学研究科研究年報, 66(1), 225-242
- Reika ICHIJO・Michiyo KATO(2018). Support for Children after the Great East Japan
Earthquake: Trends and Characteristics in Consultations Conducted by the Support Office
for Children Affected by the 2011 Disaster, Annual Bulletin, Graduate School of Education,
Tohoku University, vol.4, 37-54
- 加藤道代・一條玲香(2019). 東日本大震災後の電話相談における相談員の対応
ー東北大学大学院教育学研究科「震災子ども支援室」における6年間の相談記録の分析ー
東北大学大学院教育学研究科研究年報, 67(2), 77-89
- 加藤道代(2021). 「震災子ども支援室」の10年 月刊社会教育 65(1)国土社. 39-40.
- 加藤道代・一條玲香(2021). 東日本大震災後の子ども支援ー震災こども支援室(“S-チル”)の10年ー
東北大学出版会

3 震災こころの支援研究会 (D研)

震災こころの支援研究会(D研)は、震災と心のケアについての関連書籍、論文から学ぶ読書会として、2017年度に開始した。メンバーの多くは、東北大学大学院教育学研究科の大学院生と学部生であった。資料収集やディスカッションの司会には、震災子ども支援室の研究員が携わり、研究会の運営を支えとともに、心理学研究者の視点から活動への助言を行った。

D研の活動

- 震災関連資料の読書会(2017年度18回、2018年度14回)
- 震災関連の文献レビュー(この成果をベースに震災子ども支援室のHP上に『震災こころの支援文献データ』を作成し、震災関連の文献を検索できるようにした)

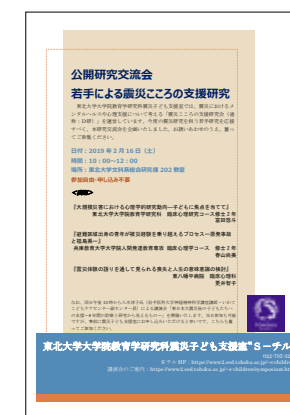
●学会での発表

関奏子・塚越友子・二本松直人・富田悠斗・千葉柊作(2019)
『東日本大震災を学ぶー当事者・実践者・研究者の視点からー』東北心理学研究, 68, 4
渡邊久留美・久我樹里佳・菅原朋・富田悠斗・千葉柊作(2019).
『大規模災害における心理学的研究動向ー子供に焦点を当てて』東北心理学研究, 68, 50

- 当研究科による大学院生プロジェクト型研究費の助成を受けた研究: 「原発避難と青年期の対人関係」
二本松直人・千葉柊作・久我樹里佳・菅原朋・塚越友子・富田悠斗・関奏子・渡邊久留美(2020).
原発避難が青年期の対人関係にもたらした影響に関する一考察
東北大学大学院教育学研究科研究年報, 69(1), 99-119

●公開研究交流会: 「若手による震災こころの支援研究」

若手による震災こころの支援研究を応援すべく、公開研究報告会を開催した。
当日は、震災研究が支援とともにあることや震災研究を実施、継続する難しさ、
研究として被災地の声を拾い発信する重要性について活発なディスカッション
が行われた。
(2019年2月16日(土) 東北大学文科系総合研究棟2階 参加者20名)



公開研究交流会チラシ

4 研究調査協力

●調査委員会委員長の委嘱

厚生労働省平成30年度子ども・子育て支援推進調査研究事業東日本大震災における
「震災孤児等への支援に関する調査研究」検討委員会委員長(2018年10月～2019年3月 加藤)

●横浜市立大学学生への研究協力(2018年12月5日)

●石巻市立大谷地小学校 震災支援に関する生徒たちからの質問対応(2019年3月8日)

5 調査

親族里親に対する面接調査（研究倫理委員会承認ID:13-1-008）

親族里親に対して半構造化面接を行い、震災により親族里親となった方々がどのような気持ちで子どもたちを受け入れ、どのようなことに戸惑いながら、子育てを行っているかについて明らかにした。

- 加藤道代・平井美弥『東日本大震災で親をなくした子どもの養育に関する調査－親族里親の声から－』
東北心理学会第68回大会 2014年11月1-2日 於:秋田大学
- 震災子ども支援室(2014).この子を育てる～東日本大震災後の親族里親の声から～
東北大学大学院教育学研究科
- 震災子ども支援室(2014).Raising this child -Voices of kindred foster parents in the aftermath of the Great East Japan Earthquake- 東北大学大学院教育学研究科
- 一條玲香・加藤道代『東日本大震災をきっかけに里親となった親族の心境』
日本発達心理学会第29回大会 2018年3月23-25日 於:東北大学

遺児家庭アンケート調査（研究倫理委員会承認ID：15-1-002）

宮城県東部児童相談所の依頼を受け、子育て状況、生活状況、保護者の精神状態、保護者交流会への関心や参加の動機等を明らかにするため、東日本大震災で親をなくした子どもを養育している震災遺児家庭へのアンケート調査を行った。

- 加藤道代『東日本大震災5年目における震災遺児家庭の現状』
日本発達心理学会第27回大会 2016年4月29日-5月1日 於:北海道大学
- 震災子ども支援室(2016).
東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育なさっているご家庭へのアンケート実施報告書
東北大学大学院教育学研究科
- パンフレット「東日本大震災で親御さんをなくされたお子様を養育なさっているご家庭の現状」
〔東日本大震災による遺児家庭へのアンケート調査〕まとめ

震災後の相談支援に関する研究 ー震災子ども支援室に寄せられた相談からー
（研究倫理委員会承認ID:17-1-003）

東北大学大学院教育学研究科震災子ども支援室の相談記録を整理し、年代や性別による相談の特徴、相談の経時的変化を分析するとともに、どのような相談支援が行われているのか明らかにすることを目的に研究を行った。

- 一條玲香・大堀和子・押野晶子・平井美弥・加藤道代
『東日本大震災の子ども支援－“S-チル”5年間の相談を概観して－』
東北心理学会第71回大会 2017年7月15-16日 於:尚絅学院大学
- Reika ICHIJO・Michiyo KATO "Support for Children after the Great East Japan Earthquake: Trends and Characteristics in Consultations Conducted by the Support Office for Children Affected by the Disaster" 16th WAIMH world congress in Rome May.26-30,2018
- 一條玲香・加藤道代『震災後の電話相談における相談員の対応①
ー東北大学大学院教育学研究科“震災子ども支援室”における相談記録の量的分析』
日本心理臨床学会第37回大会 2018年8月30日-9月2日 於:神戸国際展示場
- 加藤道代・一條玲香『震災後の電話相談における相談員の対応②
ー東北大学大学院教育学研究科“震災子ども支援室”における相談記録の内容分析』
日本心理臨床学会第37回大会 2018年8月30日-9月2日 於:神戸国際展示場
- Reika ICHIJO・Michiyo KATO(2018).Support for Children after the Great East Japan Earthquake: Trends and Characteristics in Consultations Conducted by the Support Office for Children Affected by the 2011 Disaster, Annual Bulletin, Graduate School of Education, Tohoku University,vol.4,37-54
- 加藤道代・一條玲香(2019). 東日本大震災後の電話相談における相談員の対応
ー東北大学大学院教育学研究科“震災子ども支援室”における6年間の相談記録の分析ー
東北大学大学院教育学研究科研究年報, 67(2),77-89

遺児・孤児への学習支援を通じた学生の学びに関する研究
（研究倫理委員会承認ID:17-1-004）

震災子ども支援室が実施している遺児・孤児を対象とした学習支援に参加した学生を対象に、支援活動を通してどのような学びが生まれるかを明らかにするため質問紙調査を行った。

- 一條玲香・加藤道代『震災遺児・孤児への学習支援を通じた学生の学びに関する研究』
東北心理学会第72回大会 2018年11月23-24日 於:岩手大学

東日本大震災をきっかけに里親となった親族の子育てに関する研究： 質問紙調査(研究倫理委員会承認ID:17-1-023)、 面接調査(研究倫理委員会承認ID:17-1-024)

東日本大震災により里親となった震災里親家庭を対象に、世帯状況、生活状況、これまでの養育状況、今後の関係性などを明らかにするため質問紙調査を行った。また、面接調査を実施し、里親のこれまでの養育とこれからの思いについて明らかにした。

- 一條玲香・加藤道代『東日本大震災をきっかけに里親となった親族の養育』
日本発達心理学会第30回大会 2019年3月17-19日 於:早稲田大学
- 震災子ども支援室(2019).この子を育てて～東日本大震災後の親族里親の声から～
東北大学大学院教育学研究科
- 震災子ども支援室(2019).震災里親家庭及び養育に関する調査報告書 東北大学大学院教育学研究科

震災遺児・孤児を対象とした学習支援に関する研究 (研究倫理委員会承認ID:18-1-012)

震災子ども支援室が実施している、遺児・孤児を対象とした学習支援“しゅくだい塾”に参加した子どもと保護者を対象に、学習支援への参加動機や参加後の様子について質問紙調査を行った。

- 調査結果をまとめ、“しゅくだい塾”を共催するあしなが育英会と共有した。

東日本大震災被災地の中・長期的変遷—被災地外支援者から見た子どもたち (研究倫理委員会承認ID:18-1-024)

被災地外から継続的に派遣されたスクールカウンセラーを対象に面接調査を実施し、7年間の子どもの変化とそれを取り巻く環境の変遷と緊急派遣におけるスクールカウンセラーの知見について明らかにした。

- 2020年度日本心理臨床学会の自主シンポジウムで報告予定であったが、新型コロナウイルスの影響で自主シンポジウムは中止となった。

震災遺児・孤児の声(研究倫理委員会承認ID:20-1-022)

東日本大震災で親をなくした方(震災時は子ども)に面接調査と質問紙調査を実施し、これまでとこれからの思いについて明らかにした。

- 震災子ども支援室(2021).“子どもたち”の声をきく～東日本大震災からこれまで、そしてこれから～
東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室の活動を広くお知らせするため、主催したシンポジウムや講演会の内容をまとめた報告書、年次報告書、小冊子などを刊行した。2020年度には、それまでの活動をまとめた書籍も刊行した。インターネットを利用した広報活動としては、2011年度にホームページを開設、2012年度にはFacebookのアカウントを取得し、いずれも閉室まで随時、情報を更新した。その他、ポスター、チラシ、カードの作成、東北大学オープンキャンパスでのブース出展など、様々な形で震災子ども支援室の活動を紹介した。新聞、テレビ、ラジオといったメディアの取材にも応じた。

1 出版物・報告書

● 報告書・出版物

1 年次報告書

平成23・24年、25、26、27、28、29、30、令和元、令和2年度にそれぞれ1冊、計9冊の年次報告書を発行した。



年次報告書

2 シンポジウム報告書及び講演会報告書

2011年度から2019年度にかけて、シンポジウムと講演会を11回開催し、計11冊のシンポジウム及び講演会報告書を発行した。



シンポジウム報告書及び講演会報告書

3 その他の報告書及びパンフレット

2015、2016、2018、2019の各年度に1種類ずつ計4種類、その他の報告書を発行した。2016年度には、報告書と合わせてパンフレット(概略版)も発行した。



報告書
「未成年後見人制度・
里親制度について」
(2015年6月発行)



東日本大震災で親御さんを
なくされたお子様を
養育なさっている
ご家庭へのアンケート
実施報告書
(2016年4月発行)



パンフレット
「東日本大震災で親御さんを
なくされたお子様を
養育なさっているご家庭の現状」
〔東日本大震災による遺児家庭への
アンケート調査〕のまとめ



震災里親家庭及び
養育に関する
調査報告書
(2019年3月発行)



報告書
「問題行動を呈する
子どもの支援
～発達障害を中心に～」
(2019年5月発行)

4 小冊子

2014年度に「この子を育てる～東日本大震災後の親族里親の声から～」とその英語版である「Raising this child -Voices of kindred foster parents in the aftermath of the Great East Japan Earthquake-」、2019年度に続編の「この子を育てて～東日本大震災後の親族里親の声から～」、2020年度に「子どもたち」の声をきく～東日本大震災からこれまで、そしてこれから～」の計4種類の小冊子を発行した。



「この子を育てる
～東日本大震災後の
親族里親の声から～」
(2014年9月発行)



「Raising this child -Voices of kindred
foster parents in the aftermath of the
Great East Japan Earthquake-」
(2014年9月発行)



「この子を育てて
～東日本大震災後の
親族里親の声から～」
(2019年10月発行)



「子どもたちの声をきく
～東日本大震災からこれまで、
そしてこれから～」
(2021年1月発行)

5 書籍

2020年度に「東日本大震災後の子ども支援～震災子ども支援室（S-チル）の10年～」を発行した。



「東日本大震災後の子ども支援
～震災子ども支援室（S-チル）の10年～」
(2021年1月発行)

2 その他の活動

1 ポスター

開室から閉室までの間に、日本語のポスターとその英語版、計2種類を作成した。ポスターは、自治体、関連団体、学校などに配布した。



ポスター(日本語)



ポスター(英語)

2 チラシ

開室から閉室までの間に、汎用性の高い日本語のチラシ6種類と英語のチラシ1種類、青年期用の日本語と英語のチラシ各1種類、計9種類のチラシを作成し、自治体、関連団体、学校などに配布した。チラシの表面は、子どもの成長をイメージし、植物が次第に成長していくデザインとした。



チラシ(日本語)表



チラシ(日本語)裏



チラシ(英語)表



チラシ(英語)裏



チラシ
(青年期用・日本語)表



チラシ
(青年期用・日本語)裏



チラシ
(青年期用・英語)表



チラシ
(青年期用・英語)裏

3 カード

開室から閉室までに、計6種類の日本語のカードを作成し、自治体、関連団体、学校などに配布した。カードの色は、同じ時期に作成したチラシと合わせた。なお、チラシ、カードなどの震災子ども支援室の刊行物には、ブドウがマスコットとして使用されている。ブドウの一粒と一粒が繋がっている、またはブドウの房にそつと優しく手を添えている、それらの絵は東松島市の小学6年生（2012年当時）が、震災子ども支援室のために描いてくれたものである。



カード 表



カード 裏

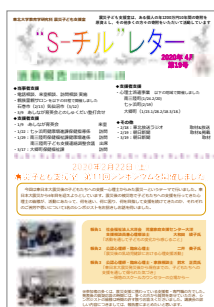
4 フリーペーパーへの情報掲載

2011年度から2015年度までの各年度、フリーペーパー（ままばれ宮城版）に震災子ども支援室の支援活動についての情報を掲載した。

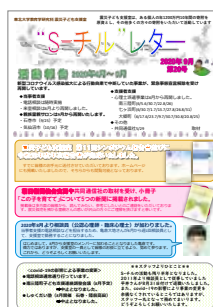


5 “S-チル”レター

“S-チル”レターは、震災子ども支援室の活動報告、テレビや新聞で報道された記録などを掲載したニュースレターで、2013年度に創刊号を発行した後、2014年度以降は各年度3回（最終年度の2020年度のみ4回）作成し、寄附者の方々に送付した。



2020年4月号



2020年9月号



2020年12月号

6 東北大学オープンキャンパスでブース出展

2013年度から2019年度までの各年度、東北大学オープンキャンパスにおいてブースを出展し、震災子ども支援室の刊行物を並べ、活動内容を紹介した。2019年度にはそれらに加えて、東日本大震災の写真、地図、統計などを展示し、震災そのものについての説明を加えた展示室を設けた。さらに、高校生に東日本大震災や震災子ども支援室の取り組みについて説明し、高校生からの質問にも答えた。（2020年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、オープンキャンパスがオンラインで実施されたことから、ブース出展は行わなかった）。

東北大学
オープンキャンパス
(2019年度)

7 第3回国連防災世界会議でのパネル展示・セッションでの発表

2015年3月14日から同月18日にかけて仙台市内で開催された第3回国連防災世界会議に合わせて、東北大学川内北キャンパス講義棟A102 教室にパネルを展示し、震災遺児・孤児の支援と親族里親サロンを中心とした震災子ども支援室の取り組みについて紹介した。仙台メディアテークを会場としたセッションでは、活動内容の発表を行った。



パネル展示



セッションでの発表

8 ホームページ作成・更新

2011年度にホームページを作成し、震災子ども支援室の理念や活動の紹介を行った。ホームページは必要に応じて、適宜、更新した。



ホームページ

9 Facebookアカウント作成・更新

2012年度にFacebookのアカウントを作成し、以降、適宜、活動状況などの情報を掲載した。ホームページとFacebookはリンクさせ、ホームページのハイパーリンクをクリックすると、Facebookにジャンプするように設定した。



Facebook

3 報道関係

1 新聞

●秋田魁新報

(2020).震災孤児の里親を紹介／支援続ける大学院が冊子 6月20日(朝刊), 22

●朝日新聞

(2014).不安・悩み多様化 被災者の命綱／電話相談シンポ 2月2日(朝刊), 23

(2015).震災孤児・遺児 今は／里親は不安 支援団体シンポ 2月11日(朝刊), 22

(2016).震災で傷ついた子ら 支える／職業・専門生かしサポート／東北大「S-チル」がシンポ
3月4日(朝刊), 24

(2017).子どもへの支援 悩みや課題語る／仙台でシンポ 2月19日(朝刊), 27

(2017).震災相談なお100件 子どもからも増加／東北大 今年度の震災支援 2月19日(朝刊), 27

(2019).大人になっても相談できる場を／加藤道代・東北大教授に聞く 12月15日(朝刊), 21

(2020).大震災と子ども／心の傷癒やす支援を息長く 3月30日(朝刊), 6

(2020).震災孤児の里親たち

使命感・戸惑い・喜び／子育て共有 道のりを冊子に／東北大支援室「社会の理解広げたい」
5月14日(朝刊), 17

●朝日小学生新聞

(2012).復興のお仕事12／2012秋／「ひとりじゃないよ」と伝えたい 11月9日, 3

●中日新聞

(2019).東日本大震災 あす8年／震災孤児里親 不安抱え／多くが親族
進む高齢化／東北大聞き取り調査 3月10日(朝刊), 1

●北海道新聞

(2012).周囲の大人が安心させて／東北大大学院 加藤道代室長 3月10日(朝刊), 29

●岩手日報

(2020).里親 孤児 絆の歴史／東北大大学院「支援室」／子育て道程を冊子に 6月18日(朝刊), 21

●河北新報

(2011).震災遺児見守り 息長く 11月1日(朝刊), 23

(2011).震災遺児 どう見守る／東北大「支援室」の役割議論 11月20日(朝刊), 16

(2011).遺児の話 耳傾けて／震災後ケア／東北大で里親研修 11月27日(朝刊), 16

(2014).透明な力を 災後の子どもたち／戸惑う里親 周囲も支えて／
東北大震災子ども支援室長 加藤 道代さんに聞く 5月23日(朝刊), 3

(2016).透明な力を 災後の子どもたち／河北新報社編集局 編／再生 発達する姿に畏敬／
評・加藤道代(東北大大学院教育学研究科教授 震災子ども支援室室長) 9月11日(朝刊), 29

(2017).電話相談 今も年100件超／遺児や里親の悩み変化／学校生活と家族関係6割／
東北大・震災子ども支援室 2月14日(夕刊), 1

(2017).あすへ 東日本大震災／子ども支援 振り返る／仙台でシンポ／被災3県から報告
2月19日(朝刊), 29

(2018).風化 東日本大震災7年／10代 語り始める／「聞いてくれる場」重要／インタビュー／
東北大震災子ども支援室 加藤道代室長に聞く 3月18日(朝刊), 30

(2020).東日本大震災9年／子どもの心の声 聴いて／東北大で被災地支援の心理士シンポ 3月7日(夕刊), 3

●毎日新聞

(2011).震災子ども支援室設置／1月から／きょう記念シンポ／東北大 11月12日(朝刊), 25

(2014).木製遊具40点を児童施設に贈る／徳島科学技術高生徒ら／亘理 12月13日(朝刊), 25

(2015).「1人ではない」伝えて／遺児シンポで支援者ら／東北大 2月8日(朝刊), 24

(2016).震災遺児支援 仙台でシンポ／東北大・40人参加 2月29日(朝刊), 25

(2017).被災児童の課題報告／東北大でシンポ／支援の大学生が紹介 12月10日(朝刊), 23

(2020).震災孤児育てた里親／東北大大学院が冊子発行 6月19日(朝刊), 17

●日本経済新聞

(2020).震災孤児の里親 冊子に／東北大院、悩み聞き取る 6月20日(夕刊), 7

●東京新聞

(2014).心災 4 次世代へ／模索 傷抱え生きる 3月11日(朝刊), 30

●東奥日報

(2020).里親と子の絆 つむぐ／道程まとめた冊子発行／東北大大学院「震災子ども支援室」
6月17日(朝刊), 18

●読売新聞

(2011).震災子ども支援室 開設／東北大／10年間担当継続 相談対応 10月21日(朝刊), 30

(2011).「子ども支援室」シンポ 11月13日(朝刊), 35

(2014).孤児2人 92歳の子育て／孫のため「あと10年は…」／高齢者多く支援必要
3月10日(夕刊), 1

(2017).「安心安全な日常 一番のケア」／東北大でシンポ／被災の子支援3人が講演
2月19日(朝刊), 31

2 テレビ・ラジオ

●名取災害ラジオ

(2014).「なとラジ801」 4月23日

●NHKラジオセンター

(2012).「ラジオ朝いちばん(東日本大震災孤児)」 7月16日

●NHK仙台放送局

(2019).「震災孤児調査結果」 12月28日

●TBC東北放送ラジオ

(2016).「東日本大震災ラジオ報道番組『3.11みやぎホットライン』」 5月9日

(2020).「絆みやぎ明日へ 親子が暮らす街～あのととき大人に何が出来たか～」 3月11日

●テレビ東京

(2011).「NEWSアンサー(東日本大震災)」 12月8日

3 その他

- 加藤道代(2012). 震災子ども支援室の立ち上げ
ー培った地域臨床のノウハウで支援ー 東北大学 Annual Review 2012, 11
- Michiyo KATO(2012). Establishment of the Support Office for Children in the aftermath of the 2011 Japan Earthquake - Support with developed community clinical practice know how- Tohoku University Annual Review 2012, 11
- 加藤道代(2013). 震災子ども支援室“S-チル”による“震災後”と“子ども支援”へのアプローチ
東北大学復興アクション100+ 東北大学大学院教育学研究科・公開シンポジウム報告書
「教育という視点からの復興支援のあり方」, 57-62
- 加藤道代(2016). 震災で親をなくした子どもたちへの支援
ー東北大学震災子ども支援室(S-チル)の取り組みー 東北大学広報誌 まなびの杜, 夏号, 2
- 加藤道代(2016). 震災で親をなくした子どもたちへの支援 東北大学 アニュアルレビュー2016, 30
- 平井美弥(2012). 震災、その後の子どもたち 第1回震災孤児・遺児支援の立場から(前)
心の健康ニュース, 380, 2-3
- 平井美弥(2012). 震災、その後の子どもたち 第2回震災孤児・遺児支援の立場から(後)
心の健康ニュース, 381, 2-3
- 平井美弥(2014). 震災子ども支援室“S-チル”とは 里親だより, 102, 13
- 国際紙パルプ商事株式会社 CSRレポート2014 震災子ども支援室“S-チル”について, 21
- 冊子「東北大学 復興アクション」第2版(2012年10月発行)から第8版(2019年8月発行)に掲載。

コラム

「残せることと残せないこと」

研究員：一條 玲香
(臨床心理士・公認心理師)

研究員として私が震災子ども支援室の活動に加わったのは、2016年4月でした。10年間の活動を目指す支援室の6年目、ちょうど活動後半に入ったところです。私の役割はこれまでの支援室の活動をまとめ、社会に発信すること、支援室が閉室した後も震災支援の知見として活用されるよう報告書、論文、書籍等が残すことでした。ところが、その作業は一筋縄ではいきませんでした。

1つ目の壁は、活動記録です。震災子ども支援室は、「震災で親をなくされた子どもの支援に役立ててほしい」という寄附者の思いを受けて活動が始まりました。支援がメインの活動だったので、一定の形式で記録をとっていませんでした。後にまとめることを想定した記録が残っていないこともありました。震災支援の文献レビューを行ったときにも感じましたが、「今、ここでの支援」を行いながら、後に知見となるものを残していく難しさを感じました。

2つ目の壁は、データの扱いの難しさです。研究員としてとても貴重なデータだと思っても、個人や関わった人々が特定される懸念から公開できないと断念することが何度かありました。一般の人から見れば、抽象的なデータであっても、関わった人々にとっては“あのデータ”となることもあります。

このような点に配慮しながら、記録をまとめる難しさを感じました。私がこれまで行ってきた予め計画したデザインに沿って行われる研究とは異なり、実践の知をまとめることに奮闘した4年間でした。残せたことが少しでも今後の震災支援に繋がれば大変うれしく思います。

「10年という時の流れ」

相談員：押野 晶子
(保健師・看護師)

2011年9月開室の翌年4月に支援事業の柱の一つである電話相談が開始されました。震災から1年が経過していましたが、様々な相談が寄せられ、震災が与える影響の大きさと痛みを感じながら、相談者の声に、気持ちに、心を寄せながら電話相談を受けました。震災後6年となる2017年に入ると、電話相談件数が減少に転じました。5年という経過により、震災が与える直接的な困りごとが減少していく様子を電話相談の件数から感じました。他方の面接相談は継続的な相談が増加していました。そこには時間の経過では解決しない深い痛みが続いていることを感じました。

2015年から2020年まで実施したしゅくだい塾は、参加する震災遺児孤児の成長を直接感じられる場面でした。当初小学3年生だった児童が中学2年生に成長していく過程の一部ではありますが、学習支援という形で関わりを持つことが出来ました。

開室当初の震災子ども支援室“S-チル”のスタッフは室長1名、相談員1名(心理士)でした。何もなければゼロの状態から、被災地に訪問し状況を伺うなかで、何が必要で何ができるのか、を検討することから始まりました。その後、相談員が増員され、研究員、事務員も加わりました。相談員に関しては、保健師、福祉士など異なった資格を持つものが従事しました。そのため、各支援を実施するうえで、多面的な視点を持つことや、それぞれの特性を事業に活かすことが出来ました。支援の方向性を検討したり、実際に支援したりするうえでも、お互いが大変心強い存在となりました。ともに従事したスタッフに謝意を述べたいと思います。

スタッフの記録

震災子ども支援室には、2011年9月の開室から2021年3月の閉室までの間、計8名のスタッフが在籍した。在籍したスタッフは以下の通り。

室 長：加藤 道代（開室～閉室）
研 究 員：一條 玲香（2017年4月～閉室）
相 談 員：押野 晶子（2012年3月～閉室）
相 談 員：亀倉 大地（2020年8月～閉室）
相 談 員：平井 美弥（開室～2020年8月）
相 談 員：大堀 和子（2013年4月～2020年3月）
相 談 員：久保 玲子（開室～2012年7月）
事 務 員：嶺岸 真琴（2019年8月～閉室）

■ご希望される方には、震災子ども支援室が開室から閉室までの間に作成した刊行物を郵送いたします。ご住所、ご所属、お名前、ご希望の刊行物の冊数（複数可）をお書き添えの上、以下の問い合わせ先までご連絡下さい。（令和3年2月末まで）

問い合わせ先

東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室

〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1
E-mailアドレス s.children@sed.tohoku.ac.jp

編集者

加藤 道代 東北大学大学院教育学研究科教授
震災子ども支援室室長
一條 玲香 震災子ども支援室学術研究員
押野 晶子 震災子ども支援室相談員
亀倉 大地 震災子ども支援室相談員
嶺岸 真琴 震災子ども支援室事務員

令和2年度

東北大学大学院教育学研究科

震災子ども支援室“S-チル”

震災子ども支援室 10年間の活動報告書
－2011年～2020年のまとめ－

2021年2月28日

発 行 者 東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室
代 表 者 加藤 道代
住 所 仙台市青葉区川内27-1
Tel/Fax 022-795-3263
E - m a i l s.children@sed.tohoku.ac.jp